

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 大村

豊橋校区史

49

*Omura*











写真撮影：小林春吉氏 平成18年5月







豊橋市制施行100周年記念

---

# 校区のあゆみ 大村



武雄山





八所神社狛犬



光道神社 霞堤の名残り





珠光院 天井画



珠光院 天井画



八所神社例祭の獅子





田園風景  
(大村小学校から保育園方面)



大葉



つま菊



出荷用のラディッシュ



# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
大村校区総代会長

内 藤 克 弘

大村の発祥は、今から1,800年前の「大蚊里・五貫森貝塚」にあると言われています。しかし、史実の始まりは、大永元年（1521）大蚊里に近藤権左エ門が入村、大永3年（1523）長瀬に白井四郎兵衛が入村したのが始まりと言われています。それから485年、豊川の洪水によりあまり史跡が残っていませんが、松原用水、八所神社の手水鉢・狛犬・灯笼、珠光院の天井画・常夜燈・手水鉢、林広寺の手水鉢、柴屋神社の手水鉢、金山神社の手水鉢、桜島・高之城・小学校校門横の道標、コンゾウボウ、定方様、霞堤、牛川の渡し、長光寺のイチョウ、昔の信州街道、耕地整理記念碑等々があります。

大村の文化は、八所神社の例祭と神輿渡御、餅投げと思われます。本年行われる大村校区100祭イベントの最後は、賞品付き餅投げを計画しました。

校区史の編集の機会を与えていただきました前総代会長田中徳美氏、顧問の市議会議員石黒巖氏に厚く御礼申し上げます。

また、平成17年2月から一年六ヶ月の長期間、22回の編集会議を支えていただきました校長先生尾崎安貞氏、サポーターの市役所職員平松悠介氏、写真撮影にご尽力いただいた大村在住の写真家白井厚氏はじめ、編集委員の皆様を重ねて厚く御礼申し上げます。



# 目次

# CONTENTS

## 第1章 自然と環境

- 1 位置、自然 ..... 7
- 2 土地のようす ..... 7
- 3 気候のようす ..... 9
- 4 交通のようす ..... 10

## 第2章 歴史と生活

- 1 大村の発祥 ..... 11
- 2 豊川の変遷 ..... 12
- 3 南北朝時代 ..... 13
- 4 大村の歴史の始まり ..... 14
- 5 八所神社 ..... 14
- 6 沖木村差出帳 ..... 15
- 7 三浦深右衛門日記 ..... 18
- 8 二十四ヶ村の初穂米 ..... 19
- 9 豊川放水路と霞堤の締め切り ..... 19
- 10 農業の変遷 ..... 20
- 11 農業団体の変遷 ..... 21
- 12 校区の活動等 ..... 22
  - (1) 大運動会 ..... 22
  - (2) 市民館まつり ..... 22
  - (3) 盆踊り ..... 22
  - (4) 交通安全運動 ..... 22
  - (5) 青少年健全育成活動 ..... 22
  - (6) 防犯活動 ..... 23
  - (7) 防災訓練活動 ..... 23
  - (8) 530運動 ..... 23
  - (9) 敬老会 ..... 23
  - (10) 成人式 ..... 23
  - (11) 元旦マラソン ..... 24
  - (12) 豊橋市水防訓練 ..... 24
  - (13) 春祭、秋祭 ..... 24

## 第3章 教育と文化

- 1 小学校教育 ..... 25
  - (1) 学校名・所在地の変遷 ..... 25

- (2) 沿革 ..... 25
- (3) 大村小学校の今 ..... 33
- 2 保育 ..... 36
  - (1) 所在地の変遷 ..... 36
  - (2) 大村保育園の変遷 ..... 36
  - (3) 大村保育園の今 ..... 37
- 3 宗教と文化遺産 ..... 39
  - (1) 真言宗系・三ヶ寺 ..... 39
  - (2) 大村不動 ..... 39
  - (3) 大村天神 ..... 39
  - (4) 大村薬 ..... 39
  - (5) 不動堂極彩色天井画 ..... 40
  - (6) 大村の三つの薬師 ..... 40
  - (7) 水害と観音信仰 ..... 41
  - (8) 六地藏はいまどこに ..... 41
  - (9) 磯丸の句 ..... 41
  - (10) わが国のメキシコ移民第一号 ..... 41
- 4 大村の神社 ..... 42
- 5 松原用水伝説 ..... 42
- 6 牛川の渡し ..... 43
- 7 昔話 ..... 45
- 8 手水鉢、道標 ..... 45
- 9 大村の人 ..... 46
- 年表 ..... 47
- 大村の昔ばなしの地図 ..... 49
- 編集後記 ..... 50





# 第1章 自然と環境

## 1 位置、自然

大村校区は、豊橋市の北部に位置し、北は豊川放水路を越え豊川市に、南・東は豊川を境として牛川町・下条西町に接しており、西は下地町・瓜郷町に続いている。

大村校区の自然と環境を考えると、校区全体が豊川下流域の平坦地に位置することから、「豊川」を抜きに考えることはできない。

この地域一帯は、昔から豊川の洪水に悩まされ続けてきたが、一方では、豊川の恵みを受け、稲作、畑作農業が発達し、現在は、稲作のウエイトは小さくなっているが大葉・花穂・ラディッシュなど施設園芸が盛んである。

大村校区のうち、市街地を形成する大蚊里地区は、昭和15年（1940）～20年（1945）にかけての土地区画整理事業、昭和40年（1965）豊川放水路の完成などにより市街化が進み、昭和40年（1965）以降、校区の人口も一気に増加している。

この大蚊里地区の東に位置する大村町（柴屋、住吉、沖木、為金）、長瀬町は、市街化調整区域内に位置し、集落地以外は農業振興



校区の田園風景

地域として農地が保護されるとともに、昔からの自然環境が保護され、田園地帯を形成している。

校区世帯数・男女別人口の推移

(各年10月1日現在)

年	世帯数	総数	男	女
S25	314	1,789	867	922
30	302	1,749	862	887
35	299	1,623	790	833
40	491	2,322	1,168	1,154
45	570	2,481	1,260	1,221
50	669	2,796	1,407	1,389
55	772	3,104	1,554	1,550
60	807	3,231	1,598	1,633
H2	871	3,331	1,655	1,676
7	937	3,472	1,707	1,765
12	1,097	3,553	1,730	1,823
17	1,258	3,717	1,793	1,924

※平成17年は4月1日現在

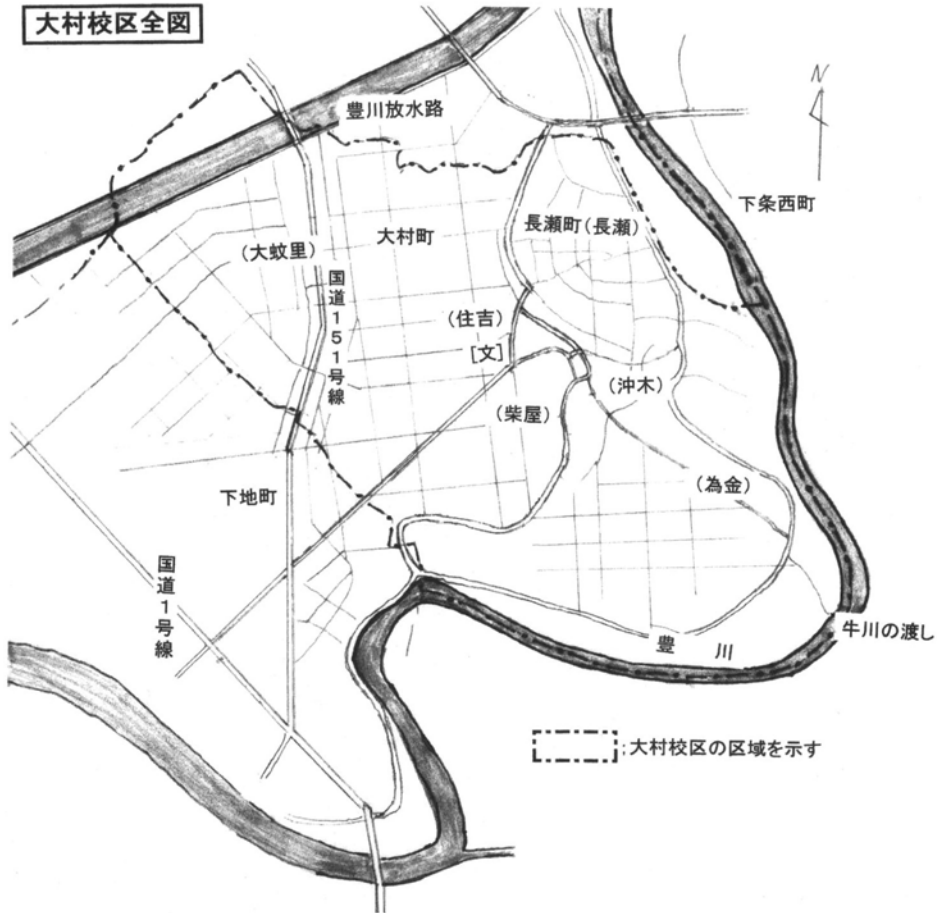
## 2 土地のようす

大村校区が位置する豊川下流域の豊橋平野は、豊川の右岸に小坂井台地、左岸に牛川・豊橋段丘の洪積層に挟まれた低地沖積層に形成された三角州、扇状地の平野が発達したものである。ここに平野が形成される過程では、豊川の流路は幾筋にも変遷していた。

大村小学校の西側に延びている松原用水は、昔は大村井水と呼ばれ、水田の灌漑に用いられてきた。松原用水の最初の取水口は、昔の豊川の川筋に沿っている瀬木（豊川市瀬木）にあったが、明応年間（1492～1501）の大洪水のために用をなさなくなり、他の所への変更を余儀なくされた。

永禄10年（1567）吉田城主酒井忠次が橋尾





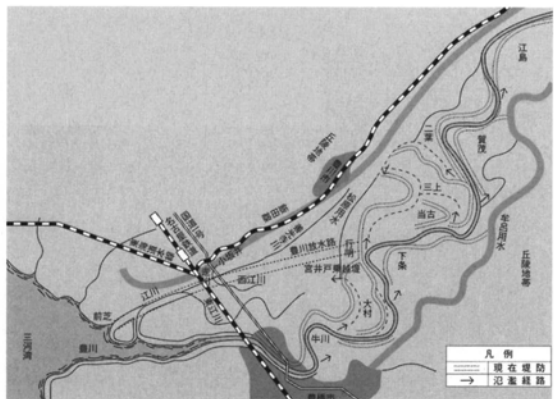
村（旧宝飯郡一宮町）に堰を設けたが元禄4年（1691）の大洪水によって、その堰も決壊してしまっただ。やむなく賀茂村（豊橋市賀茂町）の仮堰でその場をしのいだ後、草ヶ部村（旧宝飯郡一宮町）に本堰を設け、明治2年（1869）に松原村（旧宝飯郡一宮町）に移されるまで、ここから取水した。

松原用水には、八所神社の祭神にまつわる伝説で、8人の村人が犠牲となり、人柱として水神にささげられたという話（※「松原用水の人柱」）が残っている。大村の各村からの陳情の記録も残っているが、松原用水を利用する人々の水との闘いが続いた。

昭和43年（1968）の洪水により松原井堰が決壊したので、頭首工を牟呂用水と合口することとなった。現在では、松原用水からのパイプライン化が実現し、灌漑も容易なもの

なっている。

大村には、洪水の被害を最小限に抑えるため、豊川の築堤に特殊な工夫をした霞堤（かすみでい）と呼ばれる堤防がある。豊川堤防の数箇所に切れ目を作り、水位が増すと川の水が堤防の切れ目から堤防内に流入するようにしてある。



霞堤の図（豊橋工事事務所50年のあゆみ）



堤防内に入った水は、田畑に誘水し、一時的に水を遊ばせ、干潮とともに引かせるようになっていた。水量が増して一定以上に達した場合は、その誘水をさらに下流の宮井戸（大村町）に設けた堤（乗越堤）から乗り越えさせ、流量を調整した。

校区内の100%に近い人が、米・麦・芋作を主体にしていた明治の年代は、水害は悪魔のようなものであり、わずか一日の豪雨が大洪水をもたらし、米の収穫を皆無にしたこともあったという。

明治時代の終わりまでは、堤防も不完全で、ヌカデ・西浦・キレト・珠光院前・下河原・長瀬・袋小路等の決壊付近では、甚大な被害が出たという。ある人は流されて、下五井並木の松の木につかまって命拾いをしたという話さえある。

農作物は、洪水のたびに大きな被害を受けたが、一方では、肥沃な泥土（いどろ）が厚く沈積するために、少ない肥料で多くの収穫ができるという救いもあった。集落地には、屋敷を守るための石垣が組まれていた跡が今も残されている。



昭和37年7月28日の洪水

昭和40年（1965）には、豊川放水路が完成し、この放水路の完成に伴って大村地区内の霞堤が締め切られた。こうして、幾百年もの間苦しめられてきた水害に終止符を打ち、大きな恩恵を受けることとなった。

大村の耕地整理は、昭和14年（1939）組合



豊川放水路の分流堰

が設立され、校区の堤内の全耕地と堤外の一部、下地、行明の一部を合わせて四工区に分けて施工され、昭和24年（1949）をもって耕地総面積303町9反6畝17歩の事業が完了した。

### 松原用水の人柱

宝飯郡一宮町橋尾で、豊川をせき止めて豊川市を通り、大村町までの堀造りが始まった。大村までの堰も出来上がり、水を流すという日がやってきた。

ところが、大雨が降り堰が壊れてしまった。村人たちは、がっかりしながらも仕事を再開したが、大雨のたびに何度も壊れてしまった。そのうちに、誰かが人柱となって堰を守ってはどうかという話が持ち上がってきた。

しかし、なかなか話がつかず、困った川下（大村）のハヶ村の世話人が人柱になることにした。白い着物を着た8人は、鐘と鍮かねづらを持って堰の真ん中に掘られた穴に生き埋めとなった。

初めて通水する夕方、水の流れる先を八つの人魂ひとたまが並んでいき、水が田に入るところでふっと消えた。村人たちは、自分たちのために命を差し出した8人のためにお宮を建てておまつりした。これが「八所神社（八王子社）」だと言われている。

—「とよかわのむかしばなし」より  
—一部要約—

## 3 気候のようす

大村校区は、豊橋市の北部に位置して、東には豊かな水量をほこる豊川の右岸の中流域になる。土地は、沖積層で起伏はほとんどなく平坦な地形となっている。



気候は、遠州灘の黒潮の影響で、年間平均気温は16℃、降水量は年間1,700mm前後と四季を通じて比較的温暖な気候となっている。秋から冬にかけて吹く季節風は、大変冷たく強く吹くが、晴天の日が続く証となっている。

大村地域は、古くから豊川の氾濫で幾度となく水害に見舞われてきたが、その後の河川改修で水害も減少するとともに水資源に恵まれ、水稲・野菜・施設園芸など多くの農作物の栽培に適した環境になっている。安らぎと自然の多く残された豊川を地域の財産として保全していく農住地区である。

#### 4 交通のようす

大村校区の現在は、主要道路として、豊川放水路に架かる正岡橋から南西へ、大蚊里地区を通る「県道豊橋豊川線」と長瀬町の北西部から南西部にのびる「県道豊橋一宮線」がある。

昭和14年（1939）、耕地整理が始まる以前の道路は「めくら路」と呼ばれる狭い道で田にも道路がついていなかった。そのために組合員の手で行われた工事により、区間が整備され、現在のような景観となった。

『大村小学校百年誌』によると、

「明治20年代は、珠光院に通ずる道は幅員1.8mで曲がりくねっていた。長瀬畑を幾曲がりも折れて、八所神社すぐ裏側に沿って通り、大磯の郷中を経て珠光院裏から東へ出て前に廻ったのである。住吉方面よりは、長松院北側を通り八所神社西方から神社の正面を横切り為金にいく本通りがあり、主にこの道を使用していた。為金からは、堤防沿いに信州街道があり、通学路になっていた。また、野川より畑ヶ中の裏を通り小見堂を経て横走から豊田学校（珠光院内）に通ずる道もあったが、当時の道は全て耕地整理によって変わり、信州街道もわずかに八所神社東側に面影を残すに過ぎない。」とある。

大村の起源となる「大村天神」が八所神社

から堤防を挟んだ東北500m程の地点にあったのではないかという説からも、最古の信州街道がいかに重要な道路であったか伺い知ることができる。

「豊橋豊川線」は、戦時中、豊川海軍工廠に通じる軍用道路として区画整理がなされた。当時十三間道路と呼ばれ、大崎町の飛行場まで拡幅される計画があった。こうした計画に伴ったものか、昭和16年（1941）6月大村町へ東京・下関間を結ぶ新幹線の新駅設置が真剣に考慮されていたという。どちらも実現されなかったが、終戦後は、国道151号線となり、東海・北陸を結ぶ重要道路として変遷し、現在に至る。また、豊橋市街地と豊川方面を結ぶ豊橋鉄道のバス路線にもなっており、昭和42年（1967）には大蚊里歩道橋が架けられ、通学児童の安全が図られた。

「豊橋一宮線」は、以前「松原豊橋線」と呼ばれており、昭和53年（1978）に下条橋が完成した後、拡張整備された。それ以前は、現在よりも東側の長瀬町の郷中を通っていた「昔の信州街道」と記録されているものが主要道路として利用されていた。

かつての豊川には、多くの渡しがあり、大切な交通手段となっていた。大村にも「暮川の渡し」（下条西暮川～大村宮下）と「牛川の渡し」（牛川洗島～大村高山）があり、下条方面から大村堤外の畑へ通うなどに利用された。

しかし、道路の発達とそれに伴う橋梁の架設により徐々に廃止され、下条橋の完成のあとは、「牛川の渡し」がただ一つ残るのみとなった。現在では、テレビ報道されるなど、実用というよりも観光化されてきている。

こうして、現在になってからは、畑中の土埃を巻き上げる道路や牛車、大八車、リヤカー等の交通・運搬手段も、自動車や各種の農業機械に変わった。数十年の間に著しい変化と発展を遂げたといえよう。



## 第2章 歴史と生活

### 1 大村の発祥



二千年前の豊川（日本地誌より）

考古学上、豊川下流の沖積地帯であると言われている豊川右岸の洪積地と左岸の洪積地の中間にあり、入江性三角洲と呼ばれている。大蚊里や五貫森では貝塚が発見され、縄文時代後期のものだと考古学会で言われている。

行明より松の木島・野添・桜・大蚊里、瓜郷・下五井を結ぶ地域は自然堤防で、この地帯には幾つかの古墳が存在していたが、耕地整理後は全部姿を消し今は面影はない。

この細長い大地は、遠く奈良朝時代には宮島郷と呼ばれていた。大村町善蔵、勘太の境いのあたりからは弥生式後期の土器がでており、大昔人の住んだ事が立証されている。

昭和37年（1962）、玉川から大蚊里変電所に電力を送る送電線工事が行われた。鉄塔の足穴を掘っていくと地下3.5mの所に木が何本も横たわっていることが確認された。

同じように行明の宅地付近からも発掘されたことがある。その時は河口に近い関係もあって、何千年か前、流木が流れついて埋没したものとしか考えられなかった。ところが再

び大地の地帯から亜炭に近い埋木が出たと云うのは不思議なことである。一見平凡に見える大村の田園にも幾千年も前の謎が秘められている。大村町袋小路の井戸掘りの際にも6mも下に一抱えもある大木が横たわっているのが確認されたことがある。

有史以前の大村地方一帯は、洪積台地の陥没したものとも言われたり、ある時期は一面の大海原であったとも言われるが、幾万年の間に天変地変のあったことだけは想像できる。大村のあけぼのは、大蚊里付近の地に、アイヌの人達が住み、後世に貝塚遺跡を残す生活を切り開いた時に始まったと言われている。  
**大蚊里貝塚** 今から1,800年前のもの。

大蚊里貝塚は、豊川流域に分布する貝塚群の中でも奥に位置する貝塚でお宮様の付近に分布している。豊川沖積地のほぼ中央を走る自然堤防の上に営まれた低地性遺跡で、縄文時代遺跡としてはきわめて特異なる立地である。昭和23年（1948）の瓜郷遺跡調査会をはじめ、その後の明治大学考古学研究室・豊橋市教育委員会の調査で縄文後期から晩期にかけての遺跡として立証された。今でも神社の境内や畑の中に土器片が散見できる。

**主な出土品** 貝類、獣類、鳥魚類および人骨や石器が出土した。骨角器具製品土器などの土器類は、主として縄文晩期のもので、破片ばかりであるが完全な形に近いものもわずかに出土している。なかでも豊橋市域では出土した例のあまりない土偶が注目される。頭だけのものと胴体のみで頭部のないものが出土した。



女性を形どったものがほとんどで、どれも、どこか一部が欠けた形で発見されている。多くは謎に包まれているが、土偶のつくられた目的は明らかではない。生殖豊穰に関係のある宗教的呪術的儀式に使われたものであろうとする説がある。

**五貫森貝塚** 大蚊里貝塚より西方200m地点にあり、昭和24年（1949）に第一次調査が、昭和25年（1950）に第二次調査が行われた。ここからは、弥生式後期といわれる完形壺型土器が出土した。ヤマトシジミ、主にハマグリやカキなどの海水産の貝塚であると言われている。石器類は大蚊里貝塚と同じで、人骨2体も発掘されている。

**主な出土品** 五貫森土器は三河地方における縄文晩期後半の標式として名づけられ、水神不式土器が出土している。

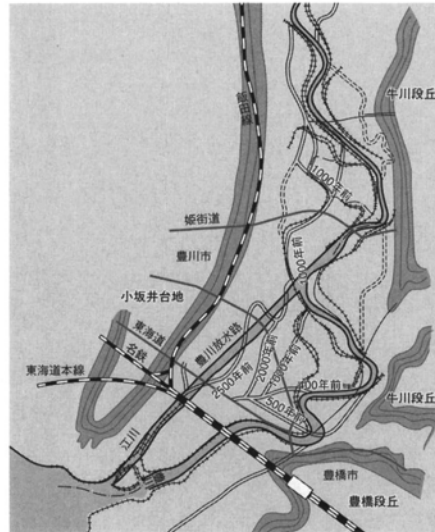
遠賀川式土器も発見され、五貫森貝塚は、縄文晩期後半から弥生時代の初めにかけての遺跡とされた。また大型の打製石斧が大量に発見されている。この石斧ではなく、鍬のような土木用具と考えられるが、稲作を裏づける石包丁とか鋤、稲の花粉などは発見されていない。



貝塚の位置（豊橋の史跡と文化財より）

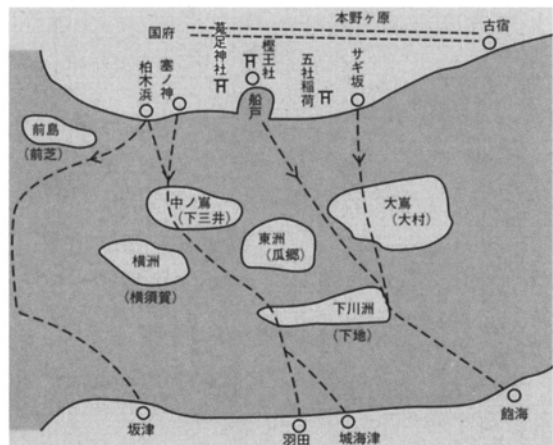
## 2 豊川の変遷

大村は豊川の洪水のたび、運んだ土が堆積してできた土地である。（変遷は下図参照）



豊川流路変遷図（豊川放水路工事誌より）

志香須賀の渡しは、平安時代の宮人が詠んだ歌に数多く残されている。



志香須賀の渡し想像図（津田保育園四十年のあゆみより）

大蚊里貝塚は、縄文式土器と弥生式土器が発見されていると言う。縄文時代は、紀元前1000年位で、今から2500年～3000年も昔になる。また、松木島、塩田方面でも弥生式土器が発見されていると言う。数年前、ある考古学グループが露出している土器を探していた。その人に塩田地区にある塚の土器を見せたところ、古いものもあるが中世のものもあると



いう。つまり、中世以後拾い集められたとも言える。

大村は豊川の洪水によって、土器が上流から流されて来たものもある。大蚊里貝塚のように、一カ所に集中してあるものは、年代が特定できるが、各地に点在しているものは、必ずしも住居をなしていたとは言えない。



千年前の豊川（日本地誌より）

645年、大化の改新により、各地に条里制が施行された。豊橋市史によれば、耕地整理前の大村の水田は条里遺構であると指摘され大村天神、大村村主の存在に信憑性が増す。しかし、千年前の豊川の地図によると、大村は島の状態で、それだけの大地があったか疑問が残る。

条里遺構のことが書かれている豊橋市史の一部を紹介する。



大村地区条里遺構図（豊橋市土地宝典より）

「宝飯郡には、一宮町大木付近、豊川市国府付近、豊川市牛久保・小坂井町付近と大規

模な条里遺構が多いが、市内の大村町にも、顕著な条里遺構がみられる。この遺構は、牛久保・小坂井地区と一連のものであって、度重なる豊川の氾濫によってかなり破壊されているが、なお旧状を残している。地割は确实なものはすべて長地型であり、方向は北から西へ38度、国府付近の条里遺構と方向を同じくしている。・・・（略）・・・

以上にみた条里制の遺構は、一時期につくられたものではなさそうである。とくに豊川低地帯のものは地形的にも後期に属すべきものであろう。また当時条里制を施行した所でも、後世破壊された所もあったはずである。しかし一応当地方に条里制の遺構が見いだされることは、班田制の実施された一つの証拠となるであろう。」（豊橋市史より）



大村地区条里遺構図（豊橋市土地宝典より）

### 3 南北朝時代

珠光院の旧庫裏の屋根裏に一升枳に入れた古銭があり、そのなかに七・八枚の和銅開宝があった。残念なことに、昭和61年（1986）秋に旧庫裏解体の折に紛失してしまった。なぜ、和銅開宝が珠光院にあったか、<sup>こうみどう</sup>光見堂の歴史から推察される。

後龜山天皇の皇子は、応永18年（1411）に生まれ、大和国万寿山に入られた。弧海和尚の弟子となり、一時、高野山にも居られ、金



蔵王・尊儀王とも尊称された。南朝再興に尽くされ、南朝の中興天皇になられた方である。45歳の短い生涯のうち、半生を三河で過ごされたと言われ、各地に足跡を残されている。光見堂に一時の仮住居されたのもこのときのことであろう。南北朝時代の真言宗は、こぞって南朝方を支持したと言われ、光見堂も真言密教の小さな寺であるから、立ち寄り、その際に、和銅開宝がもたらされたと推測される。寺紋である宝珠は受け継がれて、珠光院不動堂の屋根瓦に刻まれている。寺号珠光院の珠は、光見堂に祭られていた不動尊の宝珠の珠をとり、光は光見堂の光を取り入れて、珠光院と名付けられたという。小見堂地内に、金蔵坊という池があった。このことから、その足跡が伺える。

#### 4 大村の歴史の始まり



五百年前の豊川（日本地誌より）

明応6年（1497）8月10日、大地震のあと、大洪水があり、豊川の流路が大きく変わった。これまで、豊川の本流は現在の放水路方面を流れていたと思われるが、このとき、ほぼ現在の流路になったと言われる。淡水湖であった浜名湖に、海水が流入するようになったのも、この大地震のためと言われている。また、豊川市三上町においては、村の西側に流れて

いた豊川が東に移り、一部を左岸に残し、全村豊川右岸になったのもこのときであったと思われる。

大永元年（1521）大蚊里村へ近藤権左エ門が入村、大永3年（1523）下条の豪族白井麦右衛門の一子白井四郎兵衛が下古川に入村し、史実として、大村の歴史が始まった。明治時代に作られた宝飯郡誌には、白井四郎兵衛が入村したのも、大村の始まりであると記されている。

天文8年（1539）大津波があり、大村の歴史が流されたと言っても過言ではなからうか。永禄8年（1565）楠木正成の末えい福田七郎兵衛が大磯村に入村した。

永禄10年（1567）松原用水が導入され、人家も多くなったと思われる。社寺等も建立された。柴屋では、林広寺を開基したと言われる白井次郎兵衛の名が、慶長3年（1598）八王子の棟札に見られる。

#### 5 やとこ 八所神社



八所神社全景

八所神社は、八王子、八所社、八所神社と改称され、創立は天文20年（1551）と棟札にある。明治2年（1869）社寺御役所に提出された書類によれば、それ以前は社号大村天神と記載されている。

祭神は大村井水開祖八人恩魂を祀ると申傳

へ詳に相知不申候と記されている。

現在は、明治政府の意向を受けたと思われる八人の祭神が祭られている。

元禄6年(1693)の吉田領神社仏閣記には、柴屋村、八王子 社九尺・五尺四寸 拝殿五間・二間 禰宜助太夫とある。社殿は、現在地の沖木村にあったのに、柴屋村に属しているのが不思議であったが、大村史(伊藤博敏編)に、当時八王子は神主伊藤助太夫の所有であって、享保以後村持ちとなって、四ヶ村、年々交替して祭儀が行われたと記されている。伊藤助太夫は、柴屋の住人であって、八王子の棟札には柴屋の庄屋と思われる人が東方筆頭に書かれている。松平伊豆守寄進の狛犬が所蔵されている。

## 6 おきぎ 沖木村差出帳

寛延3年(1750)沖木村の庄屋を務めていた内藤六郎兵衛が、吉田城主松平伊豆守信復に差し出された文書の控えて、明治4年(1871)内藤家から発見された貴重な文書である。当然、各村々からも提出されたと思われるが大村で現存するのは、沖木村のみで、寛延年間のもは市内でも10ヶ村しか残っていない。

この文書で見られるように、百姓の身分では、姓を名乗ることができなかった。しかし、八王子(八所神社)の棟札には、内藤六郎兵衛、白井惣兵衛、鈴木平三郎と記されている。吉田領神社仏閣記には、八王子は柴屋村に入っていて、沖木村差出帳にも載っていない。柴屋村の住人であり神主伊藤助太夫が実権を持っていたと思われる。

家数は45軒と以外に多かったと思われる。馬は11疋とある。助郷制度があり、幕府の要人が東海道を往来するとき、人馬の提供を強要された。明治時代でも馬耕が主流で、牛耕

となったのは後になってからである。東海道の維持管理も課せられていた。

**大村四ヶ村立会** 延宝4年(1676)四ヶ村に分かれると宝飯郡誌に記されている。現在でも確かな村境がなく、血縁関係で村が分かれており、水田・畑も混在している。大村四ヶ村は、四ヶ村立会なるもので協議する必要があったと思われる。

### 一 用水指塚 壱ヶ所

#### かふ道子堤

これは堀田方面へ導水する松原用水と香道子堤が交差するところと思われる。

### 一 用水丸塚 壱ヶ所 惣兵衛屋敷

#### 四ヶ村立会

#### 但 長五間 木口壱尺貳寸四分

これは、池田排水の上に水を通し、沖木を通して堀田方面へ水を導水するためのものである。また、このことから白井惣兵衛は現当主白井幹育氏の祖先であることも伺い知ることができる。

### 一 用水塚 壱ヶ所 落合四ヶ村立会

#### 但 長三間 横四尺 高サ六尺

落合という地名は古地図に載っておらず不明である。

(推察)松原用水と宮井戸乗越堤付近の堤防が交差するところと思われる。松原用水が導入された時、宮井戸乗越堤より左に松木島方面に堤防があり、また、現在の大蚊里方面に達する堤防があった。高さ6尺とあり、これは松原用水本川の塚ではなかったか。このことにより、堤防の敷地が3間であり、また、松原用水の幅が4尺以上ではなかろうか。

### 一 悪水抜指塚 壱ヶ所 天王堤

#### 四ヶ村立会

#### 但 長拾壱間 横壱尺二壱尺貳寸

これは、小見堂樋管を指すものと思われる。耕地整理前の地図を見ると、現在の場所ではなく、珠光院前にこの塚があったと思われる。



- 客殿 五間  
六間 境内御年貢地
- 一 不動堂 式間  
珠光院境内二有
- 一 阿弥陀堂 三間  
珠光院且那村支配
- 一 葉師堂 式間  
村支配無年貢地
- 一家数 四拾五軒
- 一人別 式百六人
- 一馬 拾壹疋
- 一米三斗 庄屋給 庄屋老人
- 一豊川 川上境行明村  
川下境下地村
- 一吉田宿 助郷
- 一御地頭様人馬御役相勤申候  
横須賀村地内  
三拾壹間
- 一往還掃除場 丑寅方大磯村 戌亥住吉村  
西方柴屋村
- 一隣村 巳年高辻  
但麦代米共二
- 一米五百九拾貳俵式斗五升
- 一麦八拾壹俵四升九合 巳年勤辻
- 一わら 七束四把相納申候
- 一繩 六拾六把相納申候
- 一ぬか 式俵相納申候
- 一夫金 金貳分錢五百拾貳文
- 一御年貢米俵入 四斗入  
三斗五升納
- 一口米 三拾七俵二壹俵
- 一津出シ 御廻米之節人足御蔵江指出候
- 一用水指坑 沓ヶ所 かふ道子堤  
大村四ヶ村立会
- 但 長七間 破損之節ハ御願申上、前々々  
横巻尺二八寸 坑木被下置候

一 小土橋 百八拾ヶ所 用水溝通筋  
四ヶ村立会  
土橋杭木敷葉破損之節ハ御見  
分之上、御普請被下候

一 堤 三千四百四拾間

一 御高札 式枚 沓枚ハ切支丹  
沓枚ハ火之元

右者当村指出帳書上申候通、相違無御座候、以上

寛延三年六月 沖木村  
組頭 平三郎  
同 断惣一兵衛  
庄屋 六郎兵衛

関彦 七様  
関根次右衛門様  
関口茂助様  
長坂丈右衛門様  
関口団右衛門様

是ハ明治四辛未十一月六郎兵衛二有之候写申候

〔注〕 本史料は、『三河国宝飯郡村差出明細帳』  
〔宝飯地方史料Ⅲ〕によつた。

沖木村差出帳 寛延三年〔伊藤博敏氏所蔵〕

(表紙)

宝飯郡沖木村差出帳

御城方 方角 子丑方  
道法 壹里三丁 沖木村

一高四百八拾六石三斗七升三合

内

百九拾四石八斗八升九合

本新畑高

式百九拾壹石四斗八升四合

本新田高

但、用水之水上草ヶ部村、当村の丑寅之方、道法式

用水場

里拾八丁

横須賀村

小坂井村

宿村

篠束村

長山村

鍛冶村

馬場村

麻生田村

瀬木村

西島村

正岡村

柑子村

長瀬村

行明村

大蚊里村

下五井村

下地村

柴屋村

沖木村

大磯村

住吉村

米津周防守様御知行所

牛久保村

一今八王子社

長三尺

村支配

無年賣地

横貳尺五寸

一白山社

長二尺一寸

村支配

御年賣地

横一尺五寸

三河国渥美郡吉田町裏

住吉山

一禅宗龍拈寺末寺

住吉山

開基相知レ不申候

住吉山

珠光院

一用水坎

壹ヶ所

落合四ヶ村立会

但 長三間 高サ六尺

破損之節ハ御願申上、前々御かけ替被成下候

一悪水抜指坎

壹ヶ所

天王堤

但 長拾壹間

破損之節ハ御願申上、前々坎木被下置候

一用水丸坎

壹ヶ所

惣兵衛屋敷

但 長五間

破損之節ハ御願申上、前々坎木被下置候

一悪水抜坎

壹ヶ所

前堤

但 長九間

破損之節ハ御願申上、前々坎木被下置候

一用水坎

壹ヶ所

柳原坂口

但 長七間

破損之節ハ御願申上、前々坎木被下置候

一用水坎

七ヶ所

甚六前

但 長貳間

破損之節ハ御願申上、前々坎木被下置候

一用水坎

木口壹尺

北仲田

但 長貳間

破損之節ハ御願申上、前々下置候

一用水丸坎

貳拾ヶ所

田方所々

但 長七尺

破損之節ハ御願申上、坎木被下置候

一井枕

三本

松ノ木田

但 長三間半

破損之節ハ御願申上、前々被下置候、尤四ヶ村立会ニ而御届

但 木口壹尺五寸

破損之節ハ御願申上、前々被下置候

一用水土橋

貳拾ヶ所

用水通道筋

但 長三間半

破損之節ハ御願申上、前々被下置候

但 木口壹尺五寸

破損之節ハ御願申上、前々被下置候

但 長三間半

破損之節ハ御願申上、前々被下置候

但 木口壹尺五寸

破損之節ハ御願申上、前々被下置候



一 悪水抜坊 壱ヶ所 前堤

四ヶ村立会

但 九間 木口壱尺

これは、為金樋管と思われ、堤防敷地幅は16.2mで、霞堤の仕組みから天王堤より低くなっている。

一 用水坊 壱ヶ所 柳原坂口

四ヶ村立会

但 長七間 木口壱尺三寸

これは、不明。

(推察) 長さが7間もある。このことから酒井堤ではなかろうか。また、用水坊となっているので、当時、ここにも水田があったと思われる。

一 用水坊 七ヶ所

但 長式間 木口壱尺

道路幅が2間あったと解する。普通の道路としては広すぎる。ここには、小さな堤防があったと思われる。

一 用水丸坊 貳拾ヶ所

但 長七尺 木口壱尺

当時の道路が7尺であったことが推察される。

一 井枕 三本

但 長三間半 木口壱尺五寸

松ノ木、なかれ(流れ)、走出

松原用水の幅が三間ぐらいであったこと、この3地区より下(しも)は低地であったことが伺い知ることができる。

## 7 三浦深右衛門日記

豊橋市史の姉妹本として発行された。代官を務めていた時、大村をたびたび訪ねており、幕末の頃の大村の様子が日記に記されている。一部を紹介する。

十八日晴  
 一 暮川・五井村請出来不申、外五ヶ村八朝之内受ル、然ル処右両村甚六ヶ敷増俵出候へば、外五ヶ村江響、無取計大村江移候障さへ二相成、九ツ時頃二至候間、無摺評義之上別取計二而貳三俵相増含二而談、五井村請候故同村出立、半助八宅江帰ル、其外者大村珠光院江罷越登いたし候処江暮川も来候二付、五井同様及談候二付受ル、三俵ツ、六俵増之割合四郎兵衛殿江認上ル、夫々天王堤を為金江入、田方当荒皆無并皆無同前之場所見分、夫村前見廻り、宮井戸辺迄見分、珠光院江入夕賄いたし日の入頭帰宅

三浦深右衛門日記(豊橋市史より)

堤防の改修には、半分位、藩が拠出した。白井又左衛門は、助郷総代として活躍し、この日記にたびたび登場する。当時、各地で堤防が決壊した。水位の測り方は、堤防の高さを10等分して、堤防の頂上を1升とした。1升5勺の水とえば、堤防を乗り越えた状態である。霞堤は、7合になると堤防を乗り越すという。船町あたりの堤防が7合になったとき、宮井戸乗越堤を水が乗り越すからである。

七日雨天  
 一 先達而取年番願書出候在中祭礼之節、神楽踊今日願之通相濟候段奉行衆深右衛門江御達有之、明日取年番呼出相達候積  
 一 大村天王堤入極損見分、山方二而昨日いたし候処、八両三分余御入用懸候間、凡半金差出呉候様川村周右衛門仕様帳持参申聞候二付、其通可然旨及返答積立金之内出候積  
 十三日雨天、東風沖上ヶ□  
 一 村々注進二出ル、下条・五井・暮川夫々堤切レ候由  
 一 大村珠光院前提押切レ、水堀砂入宮井戸筋も荒候由  
 一 取ノ庄屋柴屋村白井又左衛門・下地村三蔵罷出ル、上ヶ物扇子箱一  
 一 夫々大村切所見廻り、珠光院不動堂観音堂漬、其外大破也、荒地出来ル、夫々下地村通り暮方帰宅

三浦深右衛門日記(豊橋市史より)

天王堤は、かみそり堤のこと。為金は大磯村であるが、地名はあったことがわかる。

## 8 二十四ヶ村の初穂米

松原用水開祖の八人の義人を祀ると言われている八王子様が、下郷の人々に親しまれてきた。井水鎮護の神として、用水の恩恵に浴する人々の崇敬を集め、毎年の例祭には用水関係二十四ヶ村の庄屋が参列し、盛大に行われてきた。各村々から初穂米と称して、石高に応じて割り当てられ、奉納されてきたという歴史がある。

## 9 豊川放水路と霞堤の締め切り

大村小学校創立百年誌（昭和52年発行）に記されているその一部を紹介する。

「明治32年（1899）豊川放水路開削計画が、国と県に依り計画されていたが、実現の足どりは重く、遅々として進まなかった。豊川改修期成同盟会が結成され、故植田九一氏が会長に就任以来急速に進み、実現の運びとなったのである。昭和39年（1964）5月19日、関係地区喜びのなかに完工定礎式が行われ、昭和40年（1965）放水路の完成を見たのである。放水路完成三年前、即ち昭和37年（1962）に大村地内の霞堤締切の具体策が建設省より示されたのである。二カ年に亘り、個人折衝や会合を数十回繰り返し、ようやくにして昭和39年（1964）、地主の承諾を得、受け入れることになったのである。三カ年に亘る総代さんの苦勞と豊川改修期成同盟会の植田さんの御努力により、幾百年の間苦しまされていた水害に対し終止符を打つことができたのである。また大村地区のみならず、川北地区全体を救い得たのである。

新堤用地関係者 100人

用地買上面積 4町8反6畝4歩

用地買上価格 平均32万（耕地の場合）

廃堤敷地面積 概算 3町5反

昭和42年（1967）完成

幾百年に亘る水害から救われた影には、大きな犠牲のあることも決して忘れてはならない。新堤用地買収に際し、廃堤の一部を還元すると言う条件が含まれていたのであるが、色々の事情がからみ合い、未だに廃堤敷は延々と横たわってはいるけれど実現の可能性は薄らいだのである。

この問題は「大村行政上に長く尾を引き、様々の形に変わりながら影響を与えるものとして憂慮されている。」と記されている。

当時、公共工事のために、無理矢理、土地を手放すということに、抵抗のある時代であった。バブルの始まりで、投機目的で土地の売買が、盛んに行われた。また、資金のある人は農地を買う権利のない人（医師、商店主等）まで、仮登記という方法で土地を購入した。そのため売買価格が表面に出ず、建設省の呈示価格との差が生じ、買収交渉が大変難航した。その打開策として考えられたのが、廃堤を国から払い下げてもらって、土地改良をする。その際、今回新堤に提供した土地も加えて減歩の計算をしようというものである。つまり、今回売った土地も土地改良をすれば、戻ってくるということであった。そのような条件つきで買収を承諾した。

その後、土地改良の計画が推し進められ、青写真も描かれたが、地区内の人の合意が得られず、この事業は挫折し、廃堤を還元するという約束は反故にされた。

**残された霞堤（通称かみそり堤）** 大村地区内は、条件つきで買収契約が成立したが、上流、通称マゴタ、コウゲツ間はさらに難航した。この地区には牛川町字中島があり、対岸の旧地名暮川地区の人も多く所有しており、買収交渉は一向に進まなかった。交渉成立した地区から、新堤が造られ、この地区は後回しにされた。





かみそり堤

右岸の締め切りがほぼ完了した昭和44年戦後最大級の降水量があり、江島地区の堤防が決壊した。そのため、国交省の計画が、大きく変更された。左岸の霞堤締め切りは保留し、この地区も遊水地とすると決定され、旧堤が残された。誰が名付けたのか「かみそり堤」と呼ばれている。高さがなく、また道幅も狭く、すれ違うことができず、管理道路として用をなさないため、上部へグリ石をかぶせるように敷き、高さや道幅を補充した。そのため頂上部分が、特に急斜になっており、かみそりの歯のようにとがった堤防となっている。こんなところから「かみそり堤」と名付けられたと思われる。

旧堤ながらも、一応堤防は連結しているので霞堤は締め切られたことになる。国道・県道周辺を中心に、下地、大蚊里地区では都市化が進んだ。しかし、この堤防は旧堤である。敷地面積も土の量も、新堤の半分程度である。いつ決壊するかも知れない。約35年の歳月が流れ、その間、危険な状態になった洪水もあった。

昭和44年（1969）、戦後最大級の降水量（江島地区破堤）、昭和49年（1974）の七夕豪雨、昭和57年（1982）下河原のり面崩落、小見堂地区堤防から水の吹き出し等。特にこの地区は、潮位の影響を受ける。もし、大潮の満潮時と洪水のピークが重なれば、放水路の排水機能が減り、大変なことになるかと危惧される。

もう霞堤は締め切った、洪水はないだろうと多くの人が信じているから恐ろしい。

平成16年（2004）、国交省はこの堤防の改修を決断した。関係各位のご尽力の賜物である。平成16年12月第1回地元説明会も開かれ、平成17年（2005）には地権者への説明会、現場測量とその確認と進み、用地買収も行われる。買収が終れば、築堤工事へと進む。

安心して暮らせる堤防、早期築堤に、関係各位のご協力を得て、一年でも早く完成するよう願ってやみません。

## 10 農業の変遷

古くから大村は、豊川右岸の穀倉地帯として知られ、地域住民の生業はほとんど農業だった。明治24年（1891）編「宝飯郡誌」によれば、明治21年（1888）、米2,217石、大麦118石、甘藷50,000貫を生産している。米麦中心の栽培の中、他の農産物として、長瀬地区では戦前戦後を通じて野菜を主力に、白菜・甘藷などを生産した。戦前は組合が、これらを集荷して出荷していた。

その他、養蚕が盛んに行われ、桑畑が多くあった。他地区での養蚕は、小坂井方面の桑葉を買い求める場所があったが、この地帯はほぼ自給されていた。養蚕は副業として行われたが、専業も多かった。戦時中、桑畑は食糧増産のため、甘藷畑に転換するなどして減少していった。

戦後、養蚕が衰退していく時代の流れのなかで、それなりの特産物を作らなければ生活できないという危機感から、野菜栽培に転換し、施設園芸に移行していった。こうした養蚕・・・野菜・・・施設園芸という流れは、昭和40年（1965）、豊川放水路が完成し、霞堤を締め切ってから急速に興った。それまでは、水害が多く、養蚕の方が被害が少なかっ

たため、転換が進めにくかったと思われる。

施設園芸は、当初はトマト（生食用）やメロン、イチゴであったものが、大葉に変わり花穂、つま菊、ラディッシュなどが栽培されるようになった。現在、長瀬、大村では、大葉の農家が最も多く、約70世帯が栽培している。そして、これらを特産として、豊橋温室園芸組合は大葉・つまもの系統を扱い、農協ではラディッシュの出荷を取り扱っている。



花穂

イチゴ栽培は、現在、前芝、梅敷地区において特に盛んだが、もともと大村が、昭和20年代に始めたのが発端だったという。そうした早期の頃、大村では、朝イチゴを入れた箱を駅まで自転車で運び、背中に背負い、名鉄電車を利用して、名古屋まで売りに行ったという。

また、大村では、一時期、梨とみかんの果樹栽培が目立った。養蚕から野菜に変わった人と果樹に転換した人がいた。しかし、果樹は適地ではないということで衰退していった。

昭和40年（1965）頃は、集団栽培促進事業制度の融資により、大村農協がトラクターを導入し、青年団による共同作業方式で、耕運・防除を行った時期もある。しかし、現在では、米作のウエイトが小さくなってきている。

松原用水は、平成17年（2005）、パイプラインが完成した。皮肉にも米価が下がり、有

史以来「大村どうも」と言われていた大村の美田も魅力が薄れつつある。水田が埋められ、ビニールハウスが建設されたところもある。

## 11 農業団体の変遷

明治41年（1908）に白井平四郎、小林徳兵衛、林半次らが発起人となって、購買を主とした産業組合が設立された。事務所は、袋小路（柴屋公民館）に設けられ、昔からの公民館形式の木造平屋の建物だった。一般に「組合」と呼ばれて親しまれ、購買部では生活必需品のみそ・たまり・砂糖を販売していた。

昭和6年（1931）2月、住吉（現在地）に大長信用購買販売組合を設立して事業を拡大した。大長は、大村と長瀬の頭文字をとった合名である。昭和7年（1932）には、大村小学校に、校区待望の講堂が新築され、以来、校区全体の会合にも使用されるようになり、農協もここで総会を開いた。

昭和18年（1943）、戦時中の農協団体統合により、市町村単位で農業会が組織され、昭和7年（1932）豊橋市に合併していた大村は、豊橋農業会大村支所となった。

戦後、昭和23年（1948）4月に大村農業協同組合として発足し、昭和41年（1966）3月5日、組合本館が新築された。また、大村小学校に農協所有地を売却し、校地の拡張に協力した。しかし、地域農家自体があまり農協に重きを置いてなかったといわれ、農業資材や肥料などの入手は、他の業者から購入するケースが多かった。農協としては、いかに利用を推進するか努力したが、なかなか利用されなかったという。

昭和47年（1972）4月1日、鹿菅、津田、前芝、神野新田、牟呂、下地、大村の7農協が合併して、豊橋市西部農協が設立され、本店は神野新田に置かれた。これを機に大村支



所の農協活動が活発化してきた。昭和49年(1974)9月、組合マーケット・Aコープ大村店が開店したのをはじめ、施設園芸に関する活動も活発に展開されるようになった。

平成5年(1993)、仲田に新出荷場が建設され、その隣へ、平成7年(1995)給油所も新築移転した。

平成9年(1997)、25年間続いた西部農協も市内5農協が合併して、豊橋農協となり、本店は野依町に置かれた。みんなに親しまれていたAコープ大村店は、赤字経営が続き、平成17年(2005)に閉店した。今後さらに統合が行われていくと思われる。

## 12 校区の活動等

### (1) 大運動会

平成12年度、小学校の運動会と校区運動会を一緒にして「大運動会」と呼ばれ実施されるようになった。平成17年度は第6回、曇天で始まり、とてもよい天気恵まれた。今までは、9月に実施されていたが、小学校の2学期制導入の試行として、17年度から春の開催となった。小学校関連の競技は12演技、校区関連の競技は8演技行われる。(主管：大村小学校、体育委員会)



大運動会

### (2) 市民館まつり

11月3日、文化の日に行われ、平成17年度は第24回目となる。主な行事は、演芸会と作品展である。演芸会は、小学校の体育館で、午前9時半から正午までの2時間半行われる。作品展は、午前9時から午後2時まで市民館に展示される。演芸会の最後には、お楽しみ抽選会があり、とてもにぎやかに行われる。平成18年度は、市制100祭イベントとして、拡大された内容で10月29日(日)に盛大に行われる。(主管：社会教育委員会)

### (3) 盆踊り

青年団が中心となり、お盆の8月13日に行われる。以前、踊りの輪の中心は、太鼓の櫓だけという簡素なものであったが、近年は太鼓の櫓の下に踊り舞台を付けるという大掛かりなものとなっている。約500名近くの人々が参加し、最後は、お楽しみ抽選会がある。

(主管：青年団)



盆踊りの舞台

### (4) 交通安全運動

毎年、春、夏、秋、冬に各10日間実施されている。運動の重点は、若者の無謀運転をなくそう、飲酒運転を追放しよう、こどもや高齢者を交通事故から守ろうである。期間中、土・日・祝日は休みで、長瀬(石黒建設前)、

大蚊里（アダチ鋼材前）、長松院前、元やまぐち前、大村小学校前、長瀬（田中理容店横）の6箇所で、交通安全指導を実施している。指導員は、校区の副総代、交通安全委員、婦人会、小学校PTA役員の方々である。

### (5) 青少年健全育成活動

大村校区青少年健全育成会が平成16年度発足し、年4回の会議を行っている。事業の目的は、明るい楽しい家庭づくり、問題行動の早期発見、非行防止、社会環境の浄化、広報活動、余暇の善用等である。平成10年度から「こども110番の家」が25軒指定されている。また、平成18年度には、「子ども見守り隊」が校区諸団体の協力で結成され、子どもの下校時を中心にパトロール活動を行っている。

### (6) 防犯活動

市内各地で、学校の登下校における犯罪が増加している。特に、平成17年度は不審者情報が多発している。校区でも、PTAが中心になって、総代会をはじめ、各種団体が協力して見回り運動を展開している。平成18年（2006）5月、校区みまもり隊が結成され、通常隊、緊急隊が組織された。防犯の基本は、あいさつ運動である。

### (7) 防災訓練活動

主に、9月に計画され、毎年さまざまな内容で実施されている。三河地震から60年、地震対策も含めたコミュニティ活動として、どのように訓練するか、今後の課題である。なお、毎月19日の防火の日に消防団が実施している防火活動「毎月19日は、防火の日です。お宅の火の元は安全ですか。」町内の人たちに、心温まるさわやかな呼びかけとして、親しまれている。

### (8) 530運動

「自分のゴミは自分で持ち帰りましょう」を合言葉に、昭和50年（1975）7月豊橋市が全国に向けて推進した。大村校区では、春と秋と冬の年3回、各支部単位で実施している。参加者全員に軍手、専用ゴミ袋、また、希望者には「530運動」帽子が支給される。

### (9) 敬老会

平成15年（2003）から、祝日「敬老の日」が9月の第3月曜に替わったのをきっかけに、月曜日に実施されるようになった。会員資格は、平成17年（2005）、70歳から75歳以上に引き上げられ、会員数は、303名となった。（従来は、平成12年（2000）改正し、70歳以上）（主管：総代会）



昭和10年4月20日の敬老会

### (10) 成人式

平成12年（2000）、成人の日が三連休を意識した、1月の第2月曜に変更になった。大村校区では、成人した人たちが故郷でゆっくり過ごせるようにという配慮から、前日の日曜日に実施している。式次第はつぎのとおりである。開会のことば、国歌斉唱、式辞、記念品贈呈、来賓祝辞、来賓紹介、祝電披露、誓いのことば、交通安全宣言、新成人謝辞、豊橋市歌斉唱、豊橋市民愛市憲章唱和、万歳三唱、閉会のことば（主管：社会教育委員会）





昭和34年度の成人式

### (11) 元旦マラソン

故中村眞一さんが、東京オリンピックののち始めたと言われている。「神社巡り元旦マラソン」と呼ばれていた。

小学生3年生以下のコースは、学校→光道神社（住吉）→素盞鳴神社（長瀬）→八所神社（今八王子神社、白山社、沖木）→学校、距離は約2kmである。小学生4年生以上のコースは、低学年コースと八所神社で別れ、金山神社（為金）→素盞鳴神社（柴屋）→学校で、距離は約4.5kmになる。約40年続いている伝統の行事で、154名（平成18年）の参加があった。（主管：体育委員会）



### (12) 豊橋市水防訓練

毎年5月下旬、牛川の渡しの下流、大村町高山地内と牛川町松下地内の両岸で行われている。

平成17年度は、参加人数431名、車両29台、舟艇3隻、ヘリコプター2機で実施された。町内からは、老人クラブ6名、校区防災会連絡協議会14名、大村小学校4年生36名が参加した。

避難訓練としての避難住民輸送が、陸上自衛隊のトラックを使って、豊橋農協大村支店から現地まで行われた。また、土嚢づくり、陸上自衛隊軽門橋による人員輸送も行われた。



### (13) 春祭、秋祭

八所神社と長瀬の素盞鳴神社は、3月下旬の土・日に大祭を行う。特に有名なのは、春祭の八所神社の例祭で、神輿渡御の行列（表紙参照）がある。雅楽、笹踊り、獅子（口絵参照）、稚児神楽浦安の舞、神輿担ぎ等の役があり、総勢約80名の行列になる。八所神社の秋祭は、新嘗祭と校区慰霊祭を合わせ、10月18日に実施される。

素盞鳴神社（長瀬）の春祭の例祭は、神輿、獅子、鬼が出る。鬼は各戸を回り、厄除けを行う。そのほかの大村の神社では、春祭は祈年祭、秋祭は新嘗祭として、各町内の祈願が行われている。また、新しい祭として、7月下旬、大蚊里夏祭がある。

## 第3章 教育と文化

### 1 小学校教育

#### (1) 学校名・所在地の変遷

年度	学校名	所在地
明治9年	第10中学校区108番 豊田学校	珠光院
明治10年	第10中学校区106番 宝飯郡大村立大村尋常小 学校	珠光院、 阿弥陀堂、 長松院、 海蔵寺、 八所神社
明治26年	宝飯郡大村立大村尋常小 学校	横走に新築
明治39年	宝飯郡下地町立大村尋常 小学校	旧大村役場内
大正10年	同上	現在地 (地之神)
昭和7年	豊橋市立大村尋常小学校	同上
昭和16年	豊橋市立大村国民学校	同上
昭和22年	豊橋市立大村小学校	同上

#### (2) 沿革

##### ア 開校前

大村地区は小学校が開設されるまで、他地区と同様に、庄屋宅や寺院に寺子屋があり、その名称は、郷校、義校、学校へと変わっていった。大村地区では天保年間(1830~1844)に開設されたものが多く、嘉永6年(1853)に138名在籍したという記録がある。そこには読み書きの神様として、天神様がまつられていた。各寺子屋では10~30名近くの、主に男子児童が在籍し、読み書き中心の学習が行われていた。(大蚊里：浅野弥平氏宅、柴

屋：白井又左衛門氏宅、沖木：内藤慶一氏宅や各寺院)

明治5年(1872)の学制発布を受け、大村地区では翌6年に長瀬村は海蔵寺、大村(当時は住吉村、沖木村、柴屋村、大磯村〈現為金〉)は下地村聖眼寺の豊麻学校、大蚊里村は瓜郷村満光寺の鹿菅学校で学校教育が始まった。当時は公立学校ではなく、村民の意志で学校が設立された。



大村小徽章

##### イ 開校~明治45年

本校は、明治9年(1876)8月12日に、珠光院内の施設で公立学校として開校した。大蚊里村児童は、明治16年(1883)の大村編入後から(当時は25戸)、旧明子村(現豊川市行明・柑子)の児童は明治25年(1892)に明子尋常小学校(行明寺)が開設されるまで通学していた。

珠光院に通学する道は、信州街道(今は八所神社東側だけに面影を残す)や他の道が入りくみ、道幅も狭かった。

翌年には、児童数が増加し、珠光院内では



収容しきれず、他の寺院や神社に分教場を設置した。

当時の学校経費は民費で賄われていたが苦しい財政事情であった。(授業料は家庭の貧富差・兄弟数により異なった)そこで、小学校世話方(後に、学校係、学区取締りへと名称は変わる)を中心に支援体制がたてられ、明治13年に本校では「助成講：頼母子講」が作られ、学校経費補給の役割を果たした。(各村から世話人2名ほどが選ばれ運営した)当時の学習内容は、句読、筆道、算術の「読み書きそろばん」であった。



珠光院参籠殿：豊田学校

★本地区の授業料(1人につき)明治6年

○上等 7銭 ○中等 5銭 ○下等 2銭

※ 明治6年当時の米1俵の値段 1円20銭

明治25年(1892)の明子村地区の分離にともない、高等科は大村地区から牛久保高等小学校に移った。(高等科新設は明治23年から)初代校長の岸孝氏が赴任したのもこの年であった。

当時、児童数の増加により他施設利用を余儀なくされ不便を感じていたが、多くの方々の奔走により、明治26年(1893)に横走にあった大村役場内(現長松院)に校舎を新築することができた。この地は霞堤内にあり、大昔から川の流域ということで大雨時には浸水するので、避難下校や休校になったそうだ。

【大村と霞堤】 ※大村のこぼれ話、昔話から

大村は昔、自然にできた堤防の中に村ができたのです。ですから雨期になると洪水に見まわれることが多かったのです。一度洪水が起きると村は海の中の島々のように孤立するし、田畑も大きな被害をうけます。この豊川で洪水が起きる大きな原因は、川がU字形に蛇行し、狭くなり、水の流れが悪くなり、おまけに満潮時に海からも水が逆流してくるからです。そこで、U字の部分の川の水がぶつかる堤の切れそうなところをわざと堤防を作らないであけておくのです。そして、豊川本流の堤防のほかにもうひとつの堤防を作り、二重堤防にするのです。豊川の水がいっぱいになると、堤防の切れ目からあふれた水が入ってきて二重堤防の間が池になります。〈中略〉 こうすることで、堤防が切れて田や畑が流され、石ころばかりになってしまう大洪水がなくなるのです。池もいっぱいになると、二番目の堤防でわざと低くしてあるところから水を流し、田畑や家の周りに水が流れてきます。〈後略〉



横走の新校舎

★当時の修業年限

- ◎明治6年 上等6才～9才、下等10才～13才
- ◎明治15年 初等科3年、中等科3年、高等科2年  
※初等科3年が義務教育期間
- ◎明治19年 尋常小4年、高等小2年  
※尋常4年が義務教育期間
- ◎明治33年 尋常4年、高等科4年  
※高等科は2年でも3年でも卒業
- ◎明治41年 6年制(義務教育期間)

★ 次々と「小学校令」が出され、修業年数が異なっていたが、明治15年には県内統一教科書、明治37年には国定教科書になった。

しかし、児童数はその後も増加し、分教場の設置も余儀なくされ、低学年は儀式の時だけ新校舎に入れるだけになった。

#### ★歴代校長名

1	明治25年～明治31年	岸 孝	(7年)
2	明治32年～明治41年	中島 岬	(10年)
3	明治42年～明治43年	木下 可也	(2年)
4	明治44年～昭和3年	成瀬 常次	(18年)
5	昭和4年～昭和10年	鈴木 兵衛	(7年)
6	昭和11年～昭和13年	光部島太郎	(3年)
7	昭和14年～昭和20年	清原 速雄	(7年)
8	昭和21年～昭和22年	山本喜苦子	(2年)
9	昭和23年～昭和27年	太田 泰司	(5年)
10	昭和28年～昭和29年	中野 英夫	(2年)
11	昭和30年～昭和35年	後藤 忠男	(6年)
12	昭和36年～昭和38年	恒川 敏雄	(3年)
13	昭和39年～昭和43年	笹野 政雄	(5年)
14	昭和44年～昭和49年	兵藤 聖	(6年)
15	昭和50年～昭和53年	坂口 近雄	(4年)
16	昭和54年～昭和55年	後藤 正	(2年)
17	昭和56年～昭和57年	市川 富夫	(2年)
18	昭和58年～昭和61年	高橋 和夫	(4年)
19	昭和62年～昭和63年	石川 順二	(2年)
20	昭和64年～平成4年	松井 昭年	(4年)
21	平成5年～平成9年	黒川しず代	(5年)
22	平成10年～平成11年	平松 英樹	(2年)
23	平成12年～平成14年	伴 和彦	(3年)
24	平成15年～	尾崎 安貞	

明治23年(1890)の教育勅語発令以降、「御真影拜礼」(天皇・皇后陛下の写真)、三大節儀式(新年・紀元・天長節)への参加が始まり、明治27年(1894)頃から戦時色が小学校内にも入り、戦勝祈願祭、戦勝祝賀式等に児童も参加するようになった。また、入学式、運動会、遠足、学芸会もこの頃から実施されだした。対外的には宝飯郡東部地区運動会(走力中心)に高学年が参加し、よい成績を納めていた。

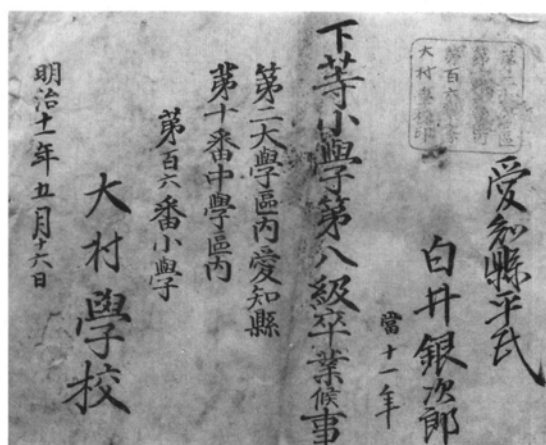
#### ★大会参加当時の様子

〈会場〉 豊川：桜の馬場  
 〈服装〉 ○男子：わらじ、着物、袴  
 ○女子：草履、袴  
 〈弁当〉 白の風呂敷につつみ、たすきがけで弁当持参

また、農繁期にはそれぞれ3日くらいの休業日があり、児童たちは農業の手伝いに借り出された。この制度も時代とともに、午後だけ休業になり、現在では設けられることはなくなった。

初等科・尋常小時代の学習は、「修身、読書、習字、算術、唱歌、体操」で、中等科では、上記以外に「地理、歴史、図画、博物、物理、農商学と女子は裁縫」高等科はさらに「化学、生理、幾何、経済」といった教科が行われた。

明治33年(1900)の学校令で高等科に英語が導入された。また、明治33年(1900)には授業料は廃止された。(国庫負担1/2制は大正7年から)



下等小学校卒業証書

明治39年(1906)、大村地区は下地町に合併し、住所も「宝飯郡下地町大字大字〇〇」(大字おお字〇〇)となり、校名も改称した。翌40年には高等科は下地小学校内に設置されるようになり、現北部中学校区が形成された。(下地・津田・大村が学区)



明治42年度卒業写真

### ウ 大正元年から昭和20年

この時期は、大正デモクラシーの思潮も教育活動に展開されるようになった時期でもあった。また、明治後半からの戦時色が太平洋戦争敗戦まで色濃く学校教育活動に影響を与えた。授業の一環として、出征兵の見送りや神社参拝等も行われるようになった。

一方、修学旅行で大正6年(1917)に半僧坊、大正11年以降は伊勢神宮に行った。大正7年(1918)には流行性感冒が流行って7日間も休校したという記録もあり、平成年度と同じことも起きている。

大正時代は、電灯も灯るようになり、川向こうの豊橋では、カフェや活動写真館もでき、盆や正月には、児童は5銭の観覧料で活動写真を見にいったようだ。

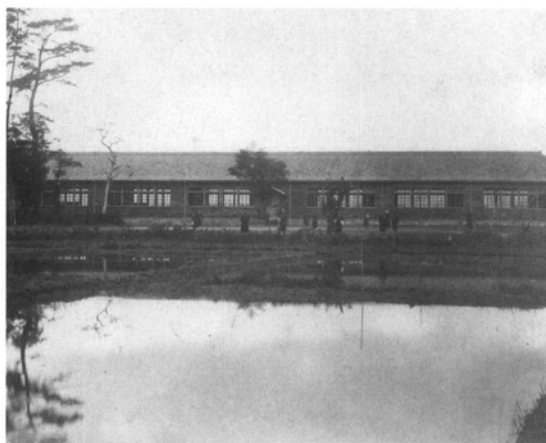
当時、横走校舎の老朽化、校舎内に児童を収容できず他施設の利用、運動場の狭さ等を解消しようと地域住民で話し合った。そして、大正10年(1921)に現在の地番である地之神に校地を移転し、校舎が新築された。運動場も広くなり、全児童が一堂に会した運動会が全校で初めてできた。

当時の服装は木綿の緋、縞の着物を着、草履をはき風呂敷に包んだ学用品を脇に抱えて通学していた。

大村地区は自然災害が多く、年中行事のように増水・洪水に襲われ水に浸かることが多く、その度に学校は休校になった。明治29年

(1896)の大洪水では1年生児童が自宅で被害に遭い亡くなっている。昭和40年(1965)の豊川放水路完成後は水に浸かることはなくなった。(明治37年、大正12・15年、昭和37・38・39年の洪水で休校)

また、平成11年(1999)には竜巻が襲来し、学校被害はなかったが、元村の温室等が多く破壊された。



現在地の地之神に新築された校舎

昭和初期、生活苦から各種の運動(農民・労働)が盛んになり、戦時色も色濃くなってきた。しかし、学校ではスポーツが盛んで、女子のバレーボール・バスケットボール、男子のテニスが優れ、郡内の多くの大会で優秀な成績を納めていた。

- |            |            |
|------------|------------|
| ○ 昭和4・5・6年 | 排球大会(女子優勝) |
| ○ 昭和5年     | 庭球大会(男子優勝) |
| ○ 昭和6年     | 籠球大会(女子優勝) |



男子庭球部・女子排球部優勝記念写真



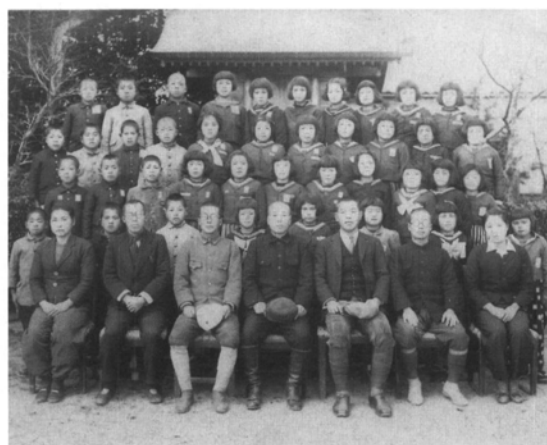
昭和7年(1932)に、下地町の豊橋市合併にともない豊橋市大村町となり、校名は「豊橋市立大村尋常小学校」と改称した。また、その年、多くの方々のご尽力で、児童・地域住民が待ちに待っていた講堂が作られた。映画の催し、各種団体の総会等も行われるようになった。昭和8年(1933)には校舎が増築され、校地拡張が順次行われていったのもこの時期になる。金次郎像も青年団のご奉仕で建てられた。



大正14年度卒業写真

戦時体制下、昭和16年(1941)から「豊橋市立大村国民学校」と改称した。学習内容も変容し、国民科(修身・国語・国史・地理)、理科(算数・理科)、体練科、芸能科(音楽・習字・図画・工作・裁縫・家事)になった。高等科では実業科(農業・工業・商業・水産業)が加わった。農繁期には学校が幼児託児所になったり、児童は2時間の授業後に農作業の手伝いに出かけ、4年生以上は麦踏、桑の皮集め等に動員された。また、授業で麦や甘藷栽培が畑をお借りして行われ、昭和19年(1944)からは運動場で甘藷栽培が行われるようになった。空襲に備え、退避壕も運動場に作られた。

昭和20年(1945)には教室を怒部隊(本土決戦の駐屯部隊)に提供し、その年の6月20日の豊橋大空襲では学校にも焼夷弾が投下されたが、職員の奮闘により鎮火させることができた。



昭和19年度卒業写真

### エ 昭和20年～昭和51年(創立百周年)

戦後、連合司令部の指令で社会生活の変化とともに教育改革(教育活動の大幅修正、教育者の調査追放等)が行われた。終戦時は食料・衣料等が極度に不足しており、ガラス等の施設も復旧できず冬季には臨時休業することもあった。

昭和22年(1947)から現在の6・3制が始まり、現校名の「豊橋市立大村小学校」となった。学習内容は国語・社会・算数・理科・音楽・図工・家庭・体育・自由研究、昭和33年(1958)から道徳が入り、後に自由研究がなくなり特別教育活動(特別活動へ)が加わった。修学旅行は、奈良・京都方面や伊勢方面に行くようになった。昭和23年(1948)に



昭和37年度卒業写真

は、アメリカの制度にならい、PTAが発足した。また、同年には北部中学校、昭和28年(1953)には大村保育園が開設された。

昭和32年(1957)には旧校舎を取り壊し、新校舎が新築され、昭和38年(1963)には待望の校歌ができた。

★大村小学校校歌

(作詞) 久曾神昇 (作曲) 田村範一

- 1 朝日かがやく 石巻に 希望の光  
仰ぎつつ  
心をみがき 身をきたえ 学ぶ 大村  
大村小学校
- 2 流れたえせぬ 豊川の はぐくむ沃野  
牛おいし  
いそはく姿 誇りにて 励む 大村  
大村小学校
- 3 雲にそびゆる 本宮の すそ野につきぬ  
幸めでて  
稲穂のほまれ いや高く 照らす 大村  
大村小学校

昭和39年(1964)には五貫森に炭鉱離職者専用アパートが建設され、68名の児童を新しく迎えた。そのため、教室不足になり増築工事や校地の拡張が行われた。昭和41年(1966)からは校舎の鉄筋化も始まった。(当初は2階建校舎)

【転校生の出身地】 ※昭和39年以降

- |          |          |
|----------|----------|
| ○長崎県 55名 | ○山口県 28名 |
| ○福岡県 23名 | ○佐賀県 4名  |
| ○宮崎県 1名  | ○岩手県 2名  |

昭和40年(1965)に、学校では豊橋市教育委員会から「生活指導」の指定、PTAは愛知県の指定を受け、「ツツジ会：鍵っ子対策」が発足し「留守家庭の児童を守ろう」をかね、運動推進に励んだ。学校とPTAと

の連携活動の中の「花いっぱい活動」が校区あげて展開され、各種の賞に輝いた。(フラワーブラボー中日賞、花いっぱい優良校等)

【PTAで取り上げた生活指導内容】

- ① 明るくスポーツをしよう
- ② ゲームやレクリエーションを楽しもう
- ③ 音楽や歌唱をしよう
- ④ 図工や作詞など創作に励もう
- ⑤ 読書をはじめ、家庭学習的なものを自主的に進めよう
- ⑥ 花づくりで美しい環境を心がけるとともに、労作するうちに人間関係を深めよう
- ⑦ 誕生会をして祝いあおう
- ⑧ 映画鑑賞や会への希望その他について話あおう
- ⑨ 野外活動をして自然に親しまおう



新聞紙面：ツツジ会

## 【えんそく】2年 S・A

※昭和41年度「大村の子」より

あしたは がまごおりへ えんそくに行くので、きょうは おとうちゃんと じどう車で 一ばんセンターに行って ガムやおかしを いっぱいかいました。五円多くなったので、家にかえったら ふくろをあけて ちよっとたべて リュックサックに入れました。そして、おかあさんに あした おにぎりを二つ作っておいてとたのみました。そして、テレビを見ながら先生が言ったことをはなしました。そして、ねました。

つぎの朝おきて、おかあさんが ちゃんとおにぎりを二つ作っておいてくれました。ごはんをたべてから、まだ、早かったので外であそんでいたら、おかあさんが行く時間よと言ったので、ぼくはすぐ リュックサックをかついて あつまるどころへ ひろくんと行きました。そして、ならんで学校へしゅっぱつしました。みんな えんそくのことをペラペラおはなしして学校へ行きました。あそんでいたら、「バスがきた」と、みんな門のところへ行きました。そして、みんな ならんで校長先生のおはなしがすんだら、バスにのりました。〈中略〉すいぞくかんに入りました。そしたら、大きなかめがいました。そのつぎは さかなや いろいろなものが いっぱいありました。



昭和45年当時の小学校

交通網の発達により、国道151号線の交通量も著しく増加し、登下校が心配の種になっていたが、昭和42年（1967）に大賀里に歩道橋が作られ、交通事故の心配も少しは薄れるようになった。時を同じくして、校区民が待ちに待った「豊川放水路」ができ、水害地区として名を知られた大村地区の水害の危険も少なくなった。

昭和44年（1969）にはプールが完成し、子どもたちは、今まで泳ぎ場がなくさみしい思いをしていたが、のびのびと水泳学習に励むことができるようになった。岩石園もでき、昭和46年（1971）には小鳥舎ができた。

そして、昭和52年（1977）2月27日、「大村小100周年記念」が校区あげて行われた。（石黒弘委員長・坂口近雄校長）百年誌発行、記念碑（友情）設立、民具展の開催等が盛大に行われた。学校では、児童の絵画・習字展が行われ、多くの参観をえた。また、記念委員会から各教室に、カラーテレビが寄贈された。（正式には昭和50年が100周年になる）

また、その年には「学習評価」の市指定の研究発表会が行われ、多くの参加者があった。



100周年：記念碑除幕式

## オ 昭和51年～現在（平成17年）

昭和53年（1978）の体育館竣工、校舎鉄筋3階建化、昭和54年（1979）から始まった校舎等の増築、PTA活動による庭園づくり等



が行われ、現在（平成17年：2005）の原型ができあがっていった。（鉄筋3階建：普通教室11、特別教室6、その他6）

校地面積等の変遷

単位は「㎡」

区 分	明治45年	昭和22年	平成17年
校地	1,861	7,963	10,108
校舎面積	343	1,320	2,956
運動場	1,175	6,583	5,829
体育館	—	182	644

※昭和22年は雨天体操場  
プール：880㎡

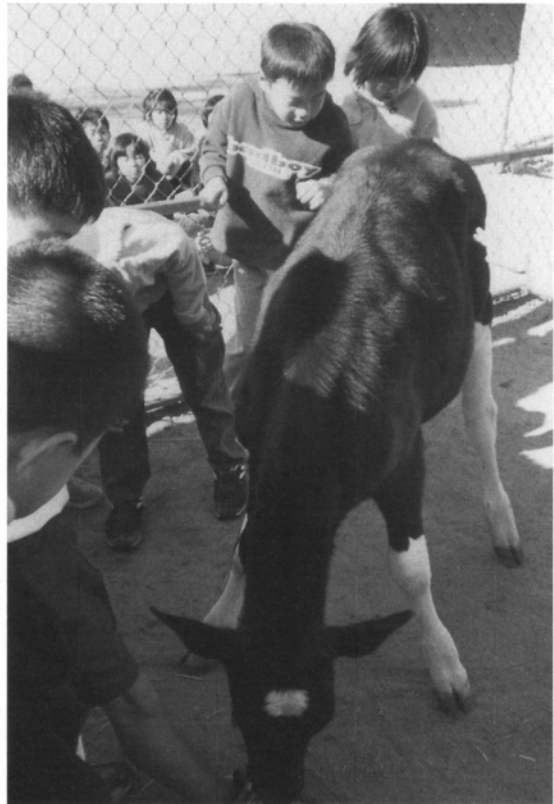
部活動は元来、バスケットボールが強く、昭和56年（1981）には男子が市内優勝、昭和57年（1982）には女子が市内3位に入賞した。

少年消防クラブも盛んに活動し、昭和61年（1986）には、東京で全国表彰を受けた。現在の大村消防団の活躍に反映しているかもしれない。

また、その年は「豊橋市制80周年」を迎え、在校生全員がそれぞれの思いを込めた品々をタイムカプセルに納め、平成18年（2006）の「市制100祭」に開封することになっている。

学校施設面では、平成7年（1995）にコンビネーション遊具設置、平成8年に児童用コンピュータ導入、保健室・職員室のクーラー化、平成10年には運動場にナイター設置、平成11年にはプールに温水シャワーの設置等、近代化が進んだ。

平成3年（1991）から本校独自で、音楽活動を通じた韓国晋州市との交流が始まり、現在に至っている。（当初は川前小との交流が始まり、後に東晋初等学校と交流。音楽交流は現在では行っていない）平成4年には校区民の有志で結成された「国際交流を考える会」



乳牛飼育



少年消防隊

が発足した。また、平成4年から校区内の酪農家から、子どもの乳牛をお借りして飼育活動も行われ、特色ある学校として市内で脚光を浴びるようになった。

## 【ミルクちゃんはとってもたいへん】

2年 S・S ※平成2年度「大村の子」より

ミルクちゃんは とってもたいへん  
うんちをとるのが とってもたいへん  
スコップでズズズー、よっこらしよ  
すくったら 教室のつくえみたいに  
とってもおもしろい  
ミルクちゃんはとってもたいへん

## 【韓国との交流会】6年 M・Y

※平成3年度「大村の子」より

楽しんでいた国際交流の日が、ついにや  
ってきた。私は、緊張してちょっと言葉がぬ  
けてしまったけど、全校の代表として、あい  
さつができて うれしかった。

歌の交流では、私たちはコヒャンエボムを  
歌い、韓国のお友達は、夕焼けこやけと大き  
な栗の木の下での二曲を歌ってくれた。けっ  
こう上手に歌っていたので、やればできるも  
んだと思った。

学年の交流では、キムハイヨンさんといっ  
しょに長縄をやった。キムさんは、最初ひっ  
かかってばっかで、なんだか嫌そうだったけ  
ど、手を引いてあげたりしているうちに、だ  
んだんうまくなっていった。自分がとべたの  
ではないのに自分がとべたようにうれしけれ  
た。

太鼓の交流では、感動しっぱなしだった。  
韓国のお友達はたくさんやってくれたけど、  
どれもリズムはのって楽しそうだったし、美  
しいひびきだった。

最後、別れる時は少し悲しかったが、今日  
一日、楽しかった。この交流会をテレビで見  
れて、またひとついい思い出が増えた。めっ  
たに経験できないことなので、小学校生活の  
中でも、忘れられない思い出になると思う。

平成12年（2000）からは長く途絶えていた  
校区との合同運動会も行われるようになった。  
学校・地域が一堂に会してふれあえる場がで  
き、その相乗効果として教育活動に幅が出て  
きている。

そして今、国の教育改革は進行している。  
本校では、「基礎基本の習得を第一」に、平  
成15年度から「人・もの、自然とのふれあい  
活動」で、文字だけでなく、実物体験活動や、  
農園活動（育て、食する学習）が始まった。  
また、平成17年（2005）に市から「小学校に  
おける英語活動」の委嘱を受け、豊橋市内の  
学校の範になるよう努めている。

平成17年度は創立130年目を迎えた。平成  
18年度から長年親しんだ3学期制から2学期  
制になる。



平成16年度卒業写真

## (3) 大村小学校の今（平成17年度）

## ア 規模等

## 平成17年度の実態

＜住 所＞ 大村町字地之神9番地

＜児童数＞ 222名

＜学級数＞ 9学級（3・5年が2学級）

※特殊学級1を含む

＜世帯数＞ 151戸

＜進学先＞ 北部中学校（津田・下地・大村）

イ 教科等名

国語・社会（3年以上）・算数・理科（3年以上）・生活科（1・2年）・音楽・図工・体育・家庭科（5・6年）・道徳・特別活動・総合的な学習の時間（3年以上）  
 ※E E（英語）

ウ 学校行事等

A 特色ある教育活動

- 韓国交流活動
- 小学校英語活動
- 農園活動
- 地域の自然・文化とのふれあい・地域の方とのふれあい活動
- 縦わり（なかよし班）活動

B 朝の活動

- 英会話学習
- 読書活動
- 学級独自活動
- 群読
- お話タイム
- 読み聞かせ会（Pボランティア）
- 朝会、なかよし集会、音楽集会



平成17年度バレーボール市内大会優勝

C 年間活動

儀式的行事	入学式、卒業式、始業式、終業式、修了式、同窓会入会式
学芸的行事	学芸会、鑑賞会、クリスマス会(3組) 各種検査(知能・学力等)、競書会
健康安全・体育的行事	定期健康診断(身長・体重・視力・聴力・内科・歯科・耳鼻科・眼科・尿・寄生虫・ぎょう虫・心電図)、運動能力・体力検査、交通安全教室、避難訓練、学校保健委員会、かけ足訓練、持久走大会、通学団会、大運動会、プール開き・プール納め、ギネスに挑戦 ※就学時健康診断(新入児)
遠足・宿泊的行事	野外学習(5年:豊橋市伊古部) 修学旅行、なかよし遠足、校外学習
勤労生産・奉仕的行事	農園活動(もち米、さつまいも、野菜) 530運動、市民の日
その他	【P】総会、資源回収(3)等 【児童会】1年生を迎える会、6年生を送る会、なかよし大集会、なかよし班活動、感謝の会 【市】市内大会(陸上・水泳・球技:サッカー、バレー、バスケット) 小学生コンサート 【その他】万博見学、チャレンジ出校日、引き取り訓練、家参会(毎月) 韓国相互訪問(1年ごと)、新1年生体験入学、110番の家お礼



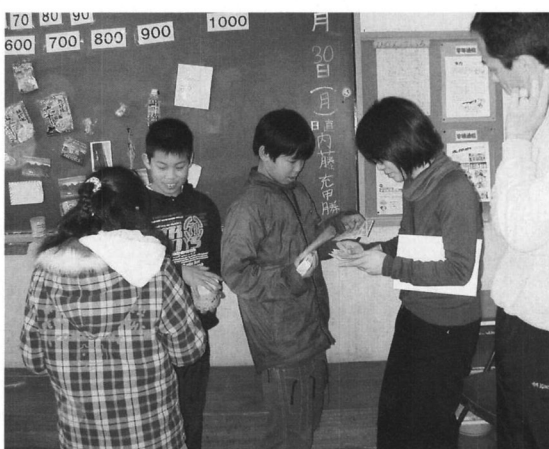
【平成17年度の学校の様子】



韓国交流



農園活動



E E 学習：英会話



自然・文化とのふれあい



なかよし班活動



大運動会

## 2 保育

### (1) 所在地の変遷

区 分	所在地	備 考
昭和29年	地之神	開 園
昭和50年	松ノ木田	新園舎
平成6年	同 上	鉄筋園舎

### (2) 大村保育園の変遷

保育園設立前は、農繁期に寺院で、戦時中は小学校で園児を預かったりして、「地域に保育園を」という声が高まった。そこで、昭和28年（1953）、当時市議員の石黒実氏（初代園長）を中心に、各地区の代表の方々が集まり、『保育園設立運営委員会』が結成された。そして、翌29年（1954）6月に『大村保育園』は大村町地之神の地に開設された。



設立当時の園舎

園地は柴屋神社内に、3教室、遊戯室、職員室、休養室を建設するとともに、園庭も整備された。建設費は市の支援や、校区からの支援で賄い、運営は校区が中心になって行われていた。定員は60名であったが、昭和39年（1964）の雇用促進住宅の完成で園児数も急増した。

昭和46年（1971）には「社会福祉法人西部

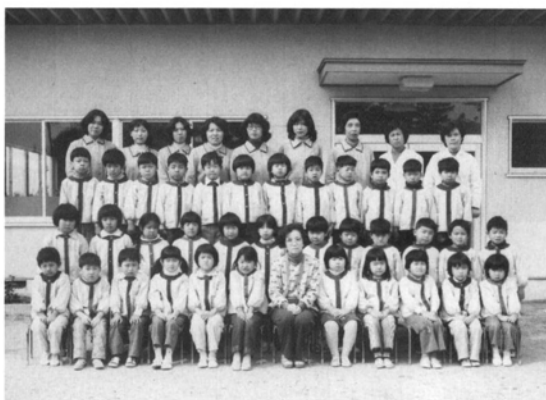
保育事業会」が保育園運営に携わることになった。当時の職員はほとんど異動することはなく、園長の交代だけであった。

隣接する小学校の運動会や学芸会には保育園の演技種目として参加していた。



昭和30年頃の園児たち

昭和50年（1975）、園児数の増加、園地の狭小解消を図り、園児たちが伸び伸びと活動ができるようにと、現園地になる大村町松ノ木田に移転し、新園舎ができた。



昭和50年度卒園写真

平成6年（1994）に、鉄筋コンクリート2階建の現園舎ができあがり、定員120名、職員数15名の規模になった。

現在では、老人会との交流活動が生まれさつまいも苗植え、やきいも会、餅つき会等が行われている。また、小学校との交流活動も行われるようになってきた。

(3) 大村保育園の今 (平成17年度)

ア 規模等

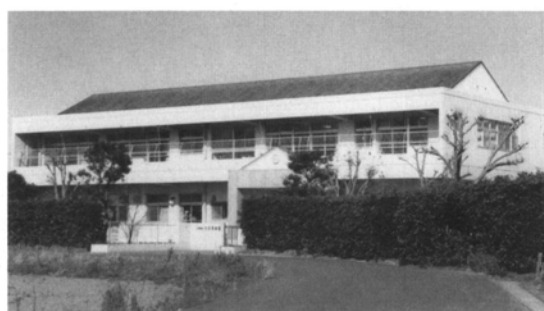
〈住 所〉	大村町松ノ木田2番地
〈園児数〉	120名
〈学級数〉	6学級
〈職員数〉	15名
〈校舎面積〉	890㎡
※園庭、プール	



平成16年度卒園写真

イ 保育園の1日

- ・ 7:30 登園、視診、事由遊び
- ・ 9:00 片づけ、体操
- ・ 9:30 おやつ (乳児)
- ・ 10:00 年齢別保育
- ・ 11:20 給食
- ・ 12:30 午睡 (乳児4~3月)  
3歳児4月~10月上旬  
4・5歳児7月~9月上旬
- ・ 13:00 好きな遊び
- ・ 14:40 着替え、おやつ準備
- ・ 15:00 おやつ、降園準備
- ・ 16:00 順次降園、長時間保育
- ・ 17:30 保育終了



現園舎



松ノ木田に移転した当時の園舎

ウ 年間活動

月	おもな行事
4	入園式
5	親子遠足、玉ねぎ収穫
6	保育参観、つるさし
7	七夕会、プール開き、個人懇談
8	夏期自由保育
9	防災訓練、お月見
10	運動会、健康診断、遠足、芋ほり
11	七五三
12	生活発表会、クリスマス会、餅つき会
1	凧あげ、入所面接
2	豆まき、保育参観
3	ひな祭り、お別れ遠足、お別れ会、卒園式
その他	年長：空手教室 (月2~3回) 【定例：毎月】 ○誕生会 ○防災訓練 ○交通安全教室 ○身体測定 【その他】 ○青空給食 ○やきいも会



【平成17年度の保育園の様子】



武雄山岡と一緒に



渡し船で



いもほり収穫祭



七夕まつり



生活発表会



卒園式

### 3 宗教と文化遺産

#### (1) 真言宗系・三ヶ寺 (現在曹洞宗)

住吉山珠光院は元高野山系の真言寺院で八名郡吉祥山のふもとにあった。室町戦国時代の天文11年(1542)現在地に移転した。武田信玄の兵火により全山(八名井・今水寺)が烏有に帰し、当時の住持・大心宗綱法印が高野山救闇院から伝・恵心僧都(942~1017年=比叡山恵心院住)作の不動明王を勧請した。

開基は下条の豪族白井麦右衛門の支流・白井四郎兵衛である。大心宗綱法印は永禄5年(1562)示寂した。また、同開基により堀内山長松院、天金山長光寺も真言寺院として同じ時代に相前後して創立される。その後、四代将軍徳川家綱の万治2年(1659)に至り、然峯克廓和尚が曹洞宗に改宗、吉田山竜拈寺の法地寺院とし長松院、長光寺も続いて改宗した。

#### (2) 大村不動

珠光院は真言寺院として当初、八所神社(大村八王子)の社僧寺だったとされ、大村不動はお宮の守り本尊としてお祭りされたこともあった。改宗後も本寺、竜拈寺と年々社殿で大般若(はんにゃ)供養を修し、昭和14・15年頃まで継続していたと言う。八所神社の大般若経六百巻は、元竜拈寺所蔵本であったと伝えられる。寛文10年(1670)刊行されたもので、平成15年(2003)1月17日に竜拈寺に返還されている。

不動明王を祭る不動堂は、万延元年(1860)旧堂を改築、東三河稀有の軍神地藏菩薩である勝軍地藏などを併祀している。

#### (3) 大村天神

大村神社史によれば、行明地内豊川の川辺に大村天神と称して、一反八畝があり、当地

より南に走る堤防を天神堤と言ひ、八所神社の所有地であった。対岸には豊橋上水道の水源地があり、風光明媚な豊川の川辺に存在していた。昔は猩月と呼ばれていたが、現在は下条西町字向月と変わり、向月と下条橋の中間に藪があり、このところに千三百年前に大村天神が建立され、大村発祥の地と言われている。

幾たびの変遷を経て、八所神社社用地に祭られていたと思える大村天神が、珠光院の不動堂の前にある。寺子屋のころから、筆子たちに学問の神様として崇められ、親しまれていたと言う。平成13年(2001)内藤英治氏が、平成11年(1999)竜巻で倒された天神を、不動堂の前に安置して現在に至っている。

#### (4) 大村薬 (不動妙薬)

近藤恒治(歴史研究家)、竹内一石(医師)等の研究によると、わが国最古の医書として「大同類聚方」があり、平城天皇の大同3年(808)5月、従五位下典薬頭安部朝臣真貞、侍医従六位出雲宿弥広貞等が勅に奉じ、古来の薬方を材料として薬疹したものである。

同書の最も古い三河関係の記載に、「大村薬」が採り上げられている。「大村薬」は、三河国大村に伝わる、小児の「牟之加武利也民」(ムシカムリヤミ)の薬である。その後、大村珠光院のゴムソーウと称し、恵心僧都の伝法と言ひ伝えられ、数百年以前から、妙方丸と称する薬を、珠光院で販売した。水気、痰に奇功あると言う。世間では「大村薬」と唱えられている。その後、明治末年から昭和にかけての記録によると「百補散」(ちのくすり)・「疳治丸」(むしぐすり)・「熱取丸」(ねつとり)・「大宝丸」(はらぐすり)の四種類があった。どういう訳か、前記の妙方丸は入っていない。

大正5年(1916)6月に、新たに発売免許

を申請した「明王丸」があり、その効能は「黄疸・貧血症・胆石・ヒステリー・シャク・りういん・すいき・ちょうまん・胸のつかえ」とあって「妙方丸」に似ている。大村薬の名称は一千有余年の長期に亘って三河の地に伝えられたが、昭和初年に至って消滅した。

### (5) 不動堂極彩色天井画



天井画の一部

不動堂は万延元年（1860）に現在の堂に改築された。その後、内陣に48枚、外陣に30枚の天井画が描かれている。風雨により外陣はだいぶ傷んでいるが、当時の独特の絵の具のせい、極彩色の輝きは衰えていない。これらの絵は、吉田藩の御用画師となっていた稲田文笠と、その門下鈴木拳山等数人で描かれている。

稲田文笠は文化5年（1808）、渥美郡吉田方野田村に生まれ、名は林広といった。文政11年（1828）21歳の時、江戸に赴き、旗本や医師の家に奉公しながら、内藤松嶺、狩野探玄に画道を学んだ。文政13年谷文晁を知り、その学僕となった。

天保3年（1832）から天保5年にかけて奥州に、その後は畿内地方へと遊歴し、多くの作品を描き、酒をよく呑んだと言われている。

安政元年（1854）吉田藩から、地震で破損した二の丸御殿の襖の修理を頼まれ、見事な「竹」を描いてその画力を認められ、苗字帯刀を許された。これを機に吉田藩の御用絵師となったと思われる。画風は、南画風で微密な着色画から、筆法の鋭い水墨画まで描いた。山水、花鳥を得意とした。

明治6年（1873）8月26日、66歳で没した。法香院には、自分で建立した墓碑があり、その背面に自ら描いた〔出山之釈迦〕が見事に彫られている。

鈴木拳山は、天保13年（1842）に、宝飯郡下地村の鈴木弥次郎の子として生まれた。拳山は、明治元年（1868）以後の雅号であり、それ以前は、龍雨または成道と号した。嘉永5年（1852）頃から稲田文笠の門に入り、画道を学んだ。安政4年（1857）の湊町神明社、弁天堂の天井画、文久2年（1862）の大村珠光院、不動堂の天井画が現存している。明治元年以後、号を拳山と改め、画技を深めるために、近江、美濃、信濃、伊勢の各地を遊歴した。明治10年（1877）から明治14年（1881）5月まで、小坂井の兎足神社に勤め、この間明治10年（1877）から明治12年（1879）は同社の祠掌の職にあった。拳山の画風は文晁系の画法を受け継ぎ、山水画、花鳥画の技法を取り入れ、特に魚介の作品を得意とした。拳山は終生独身を通し、酒を呑んでは描き、描いては酒を呑むという酒豪であった。時には酒癖が災いして、世人との交わりを絶つことがあり、奇人と噂されたが意に介せず、悠々自適、清貧に甘んじた生活を送りながら、文晁系の画法を受け継ぎ、独自の世界を築き上げ活躍した。大正4年（1915）11月15日、74歳で没した。

### (6) 大村の三つの薬師

寺の過去帳によれば、大村は、江戸から明



治にかけて、年に数回の豊川の氾濫があった。そのため、衛生状態が悪く、栄養も思わしくない事から、子供の死亡率も高く、3人生まれて1人が育つぐらいの割合だったと言う。

月の7日は、お薬師参りと言われ、各村の医王として、お薬師にお参りしていた。

柴屋の薬師は、柴屋村字薬師にあったが、明治初年(1868)に、天金山長光寺に祭られている。大磯の薬師堂は、最も古く、元薬師と云われていたが、昭和50年代に民家に転用するため、仏像のみ珠光院に仮住まいして、大磯、畑ヶ中の6軒で年に一度供養している。また、沖木の薬師堂は、昭和47年(1972)に、横走アミダから珠光院に移転した。古くは、10月7日の夜から8日に祭りが行われていたが、現在は沖木総代とOBの5人で、祭りの日から一週間、毎朝、霊前を備えてお祭りしている。

### (7) 水害と観音信仰

大村は、豊川の放水路が完成する以前は、年に数回豊川が氾濫して、道路・田畑は冠水して水深2mぐらいになり、床下浸水も年に2・3度あった。

江戸末期に天災から逃れるため、三十三観音を建て信仰した。また、自分の屋敷に観音様を建てる家も多く見られた。珠光院前の堤防が決壊したとき、三十三観音は流されたが、村人には被害はなかった。それ以来、身代わり観音と呼ばれ、毎年8月17日に法要が、百数十年にわたって行われている。現在の施主は、沖木・住吉各11軒、柴屋12軒、大磯・為金8軒、合計42軒でお祭りが行われ、盆踊りも奉納されている。

平成11年(1999)夏、わが国最大級の竜巻が、野依付近で発生し、本宮山に向かって北上して、家屋を倒壊し、屋根瓦を吹き飛ばした。珠光院の三十三観音も堂ごと吹き飛ばさ

れたが、町民の事故は軽傷で済んだ。

長瀬町の観音供養も同じ日に行われている。

### (8) 六地藏はいまどこに

大村には四ヶ所に三昧所(火葬場)があった。

大村町字島にあった柴屋村橋田山東昌寺(花井寺末寺)は、明治末に廃堂となり、火葬場も現在小公園になっている。大蚊里の火葬場も公園になり、六地藏は、神寿山東昌寺(満光寺末寺)大蚊里公民館の裏の墓地に祭られている。長瀬町と大村の火葬場は、平成13年頃から相次いで農業ポンプ場になり、その六地藏はそれぞれ、長瀬は海蔵寺の無縁墓地、大村は珠光院の無縁墓地に移転して祭られている。

### (9) 磯丸の句(二首)

歌聖磯丸翁が、天保14年(1843)に珠光院に訪れ、二首を詠まれている。

世にとふも かかるお寺の名にしおふ  
珠の光は くもらざりけり  
まれに来て あふぎ見んとは おもひきや  
法のうてなの 珠の光を  
七十八翁磯丸と書かれている。

### (10) わが国のメキシコ移民第一号

『メキシコ榎本移民〔大村から団長と三人〕』

あまり知られていないが、明治の中頃、近代国家建設のための一つの手段として、殖民に脚光が集まり、その場所としてメキシコに白羽の矢が立てられた。南メキシコの原生林を開墾し、広さ64,000町歩(一辺が25km)の日本人植民地を建設する計画である。ここに、コーヒー栽培を中心とした農業を行い、日本人が未来永劫に住み、日本との貿易を行い、メキシコと日本の経済発展に貢献することが理想として掲げられた。明治30年(1897)ラ

テンアメリカにおける、日本人による最初の植民地建設計画であり、日本人移住の第一歩でもあった。

推進者が榎本武揚であったことから（榎本植民地）と呼ばれている。現在メキシコを訪問する日本人は、年間7万人、メキシコにおいてさえ、殖民団員となって、日本とメキシコの友好と発展のために生涯を捧げた日本人について、知る人は少ない。明治30年（1897）3月24日午後4時、横浜港からアメリカ国籍のゲーリック号〔4,200トン〕に、青年たちの集団が乗り込もうとしていた。駐日メキシコ公使が「わが国に移住される諸君は、勤勉に、開墾に従事され、諸君が利益を得られると同時に、両国の親善平和に寄与することを期待します。」とはなむけの言葉を送った。この84人の中に、メキシコを最終目的地とする36人の通称「榎本殖民団」が乗り合わせた。20代の青年たちばかりである。36人中、愛知県宝飯郡出身は、鈴木応二（藤佐衛門の子孫、沖木）、鈴木若（大磯）、中村善平（大磯）、山本浅次郎（住吉）、渡辺八平の5名で、渡辺を除く4名は、大村出身である。

移民の夢はかなわなかったが、現在三世、四世がメキシコで活躍している。

#### 4 大村の神社

**今八王子社（沖木）** 字大日に鎮座していた。神社仏閣記に社三尺四方と記されている。白山社と合祀して八所神社内に鎮座している。

**素盞鳴神社（柴屋）** 午頭（ごず）天王社と称していた。神明社、定方社も合祀されている。神社仏閣記に天王 社五尺、三尺。神明社三尺四寸、二尺四寸と記されている。

**金山神社（為金）** 神社仏閣記に金山宮 社二尺五寸、一尺九寸。天王 社一尺七寸、一尺四寸。水天宮と稲荷大明神も合祀されている。

**光道神社（住吉）** 現在俗に香道子（こうどうじ）と呼んでいる。神社仏閣記に住吉大明神 社六尺、四尺。香道子 社五尺、三尺。住吉大明神は為金の江川にあった。今も住吉の共有地があり、周辺の畑を「おすみよし」と呼んでいる。

**素盞鳴神社（大蚊里）** 宝飯郡誌によると創建は寛文2年（1662）であるが、近藤家の墓碑に近藤権左エ門藤原友和は信州の浪士であったが、大永元年（1521）三州大蚊里に移住し、同7年八幡社を勧請し、享禄4年（1531）午頭天王社を勧請し、神職を勧めたとある。神社仏閣記に、午頭天王 社四尺、三尺五寸。拝殿 三間、二間。薬師堂 二尺、一尺五寸。正八幡宮 社三尺五寸、三尺。観音堂 一尺五寸、一尺。天神 無社森有と記されている。

**素盞鳴神社（長瀬）** 宝飯郡誌によると、祭神素盞鳴命、末社2社、氏子53戸。慶長14年（1609）9月創建。津島午頭天王より勧請。また、神社仏閣記には、午頭天王 社三尺五寸、三尺。拝殿 三間、二間。八王子 社三尺、二尺五寸。白山権現 社二尺、一尺五寸。薬師堂 無堂森有と記されている。

#### 5 松原用水伝説

**第一の伝説** ある年の夏、田に水がなくて稲は枯れ、収穫皆無。病人が続出した。この有様を見るに見かねた大村の八人が、堰を築き、溝を掘り、水を引き入れたが、溝下までは一滴の水さえ流れて来なかった。そのため、八人は用水のほとりで斬首の刑に処せられた。そのとき、一天俄かにかき曇り、大雨となって、用水に満ち溢れ、溝下まで余すところなく灌漑されたと言う。打首にされた八人の血潮は、三日三晩大村まで流れて来たと言う。村人たちは、深く悲しみ祠を建てて御祀りしたと言う。

**第二の伝説** 新用水開削の議がおこると反対の声が強く、昼間の測量は妨害によってできず、夜間、火縄の火や提灯の光をたよりに測量を続けたと言う。あるときは、本宮山に登り、めいめい岩に願をかけ、工事の完成を祈願したと言う。

このようにして井堰は築き始められたが、容易にはかどらなかつた。そこで、八名は命を水神に捧げて、従容として、人柱となり川底に沈んで行ったという。このようにして、井堰は築かれ、水路には水が溢れ、幾百町歩の水田に水は潤うことができたという。村人は八人の霊をいたく哀れみ、一字を建てて、御祀りしたのが八王子様だと伝えられている。

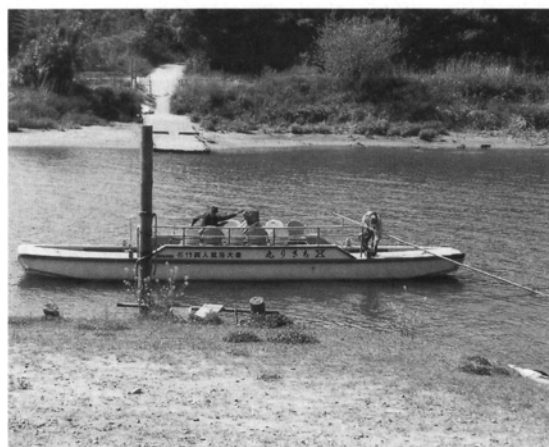
**第三の伝説** 元禄4年(1691)、橋尾井堰が大破し、上流の草ヶ部村に井堰を移すという直訴事件にまつわる伝説がある。

井組十九ヶ村を代表し、幕府奉行所に直訴した大村の庄屋内藤弥太夫、下五井村庄屋権左衛門、牛久保村庄屋十右衛門の三人は、思いがけなく無罪となり、帰村を許されたが、村に居残った庄屋のうち、首謀者と見られる八人が捕らえられ、用水のほとりで打首の刑に処せられたと言う。

**第四の伝説** 来る年ごとに、用水の水が少なくなり、村人たちが心配していたとおり、ある夏のこと、カラカラ天気が幾日も続き、稲は枯れ始め、病人も続出した。何とかしなければ村中がだめになると、何度も寄り合いを重ねた結果、村人が総出で堀をつくり、川をせき止めて水を引いたと言う。八人の庄屋は、直訴のかどで捕らえられ、お宮の東にある池のほとりで、打首になり、血刀は池の水で清められ、死骸は遠くへ運ばれて埋められたと言う。村人達は、庄屋の霊に深く感謝し、一字を建てたが御上をはばかり、今八王子の宮と名を変えてお祀りしたと言う。

## 6 牛川の渡し

豊川はそのむかし飽海河と呼ばれ、都から東国へ行く人々にとっては、避けては通れない難所であった。承和2年(835)、官道の整備をうながす太政官符には、飽海河の渡し船を2艘増加するという記述が残されている。「飽海河の川幅はたいへん広く橋を架けるには困難である」というのがその理由であった。橋をかけられない以上、当時の人々が河を渡るには浅瀬を歩くか渡し船に頼るほかなく、一千年以上の昔からこの地に渡し船があり、多くの人に交通の要路として利用されていたことがうかがえる。



現在の牛川の渡し

現在の豊川河口周辺は、古く平安時代には「志賀須賀(しかすが)の渡し」という名で知られており、当時およそ4キロもの幅のあった川を船によって渡るといふ、東海道の難所の一つであった。10世紀の半ばに村上天皇が各地名所の景色を描かせた際に、飽海川の景色も取り上げられ、それがきっかけになって人々に知られるようになったと言われている。当時の書物や歌にも、

思ふ人有となけれど古里は

しかすがにこそ恋しかりけれ

(能因法師)



達せこそ間遠なり共しかすがに

渡りなれにし中な忘そ

(二品法親王慈道)

といったようにその名を見ることができ、かの『枕草子』にも「渡しはしかすかの渡し」と書かれている。当時の豊川下流は河口というよりは、中州や三角州の発達した入り江のようであり、その当時の大村や下地は今のよう陸続きでなく、いまだ豊川の一部であったり、中洲や川中島の一つであったと考えられている。渡しの場所も一定ではなく、川の流れの変化などに伴い変化していた。

10世紀の末になると、律令体制の崩壊とともに、官道の一つである志賀須賀の渡しはしだいに機能しなくなっていた。当時詠まれた歌にも、

行き通ふ船路はあれどしかすがの

渡りはあともなくこそありけれ

(源 順)

というものがあり、既にこの渡しがさびれてしまっていたことがうかがえる。人々の多くは危険な下流を渡るのではなく、より上流で川幅の狭いところを渡るために、現在の姫街道の方面を行くようになり、東海道と比べるとやや上流の石巻町、当古町の辺りに渡し船ができ、そちらを通過して東国へ行き来するのが主流となっていた。こちらは、後に鎌倉街道と呼ばれるルートで、その後下流の「渡津の今道」が整備されて、再び東海道が主街道として活気を取りもどすまでのおよそ200年の間、主要道路として栄えていたと言う。

現在大村町と牛川町を結んでいる「牛川の渡し」について、その起源を明らかにするはっきりとした記録は残っていないが、以上のような背景の中で始まったと考えられており、そのルーツは古く平安時代までさかのぼることが可能であると言われている。

戦国の世が始まり東西の行き来が活発にな

るにつれ、豊川を渡るための渡し船の需要はさらに増した。最盛期であった戦国時代から江戸時代にかけては、豊川中流から下流にかけて、およそ二十箇所以上もの渡し船があったと言われている。しかし、明治以降、架橋などに伴う交通機関の発達の中で、次第に渡し船は姿を消していった。近年では昭和41年(1966)に当古橋、賀茂橋の竣工により当古、賀茂の渡し船がそれぞれ廃止され、昭和53年(1978)に下条橋の竣工により行明の渡し船が廃止、昭和55年(1980)に三上橋の竣工によって三上の渡し船が廃止となり、現在では牛川の渡しのみが唯一その姿を残している。

渡し船は旅人だけのものではなく、この地で暮らす人々にとっても生活道路として、あるいは商業の要路として必要不可欠なものであった。特に江戸時代には牛川河岸の下流に後藤河岸、芋河岸という二つの河岸が栄えていた。後藤河岸は江戸時代、豪商の後藤庄五郎によって作られた河岸で、当時の吉田城主の命令によって作られた石灰を、大坂や江戸に運ぶためのものであった。明治になると民営となり、その後も石灰や石灰石を運ぶのに使われていたと伝えられている。芋河岸は、さつまいも専用の河岸で、沖野でとれたさつまいもを、船で名古屋や四日市へ運ぶためのものであった。芋栽培は明治まで盛んであったが、養蚕が盛んになり、芋畑が桑園へと変わっていくなかで、明治の中ごろにはだんだんとさびれてしまった。

明治末に下川村の村営となった牛川の渡しは、村が豊橋市に合併になった後、昭和7年(1932)には市営となった。現在では「市道175号線牛川町大村町線」の一部として、豊橋のマークにちなんだ形の渡し船「ちぎり丸」が運行している。



船よび板と渡船運行時間

船着場は大村町側と豊橋創造大学の近くにあり、船頭さんが約80メートルの距離を竹竿を使って漕ぎ、およそ5分もあれば対岸には着いてしまう。渡し船自体は全国を探せば決して珍しいものではないが、櫓を使って漕ぐのではなく、竿で川底をおして進むという船はこの牛川の渡しだけである。渡し船のある河原には「船よび板」があり、対岸に船がある場合はこれを鳴らして船頭さんに迎えにきてもらう。船の定員は10名ほどで自転車も乗せることができ、平日には通勤や通学の足として、現在も人々の生活を支えている。平成6年に渡し船の業務は市から民間の業者に委託された。今では災害などよほどのことがない限りは、暑い日も寒い日も毎日休むことなく運行している。

牛川の渡しは、交通がたいへん便利になった今でも、人々の生活手段の一つとして活躍している。そしてこれからは、観光活動を通じて、古くからの伝統を伝えていくという新たな役目も担っていくと思われる。

## 7 昔話

### (1) 大蚊里村 (伝説)

大蚊里村は、五貫森に関係深く、大昔この村に蚊とも、こうもりとも見分けがつかない怪物がおり、夜な夜な人々を悩ましたと言う。

やがて退治されて、ねんごろに五貫森と呼んだと言う。大きな蚊の里の名称はここから生まれたと語り伝えられている。

### (2) ジネゴ様 (伝説)

幕末頃、大蚊里村百年子の田園の中に弁当塚という小丘があった。塚の名は百姓が弁当を使うに都合がよかったから、その名がつけられた。ジネゴ様と言って老松の下に男根をかたちどった石があった。「婦人が拝むと必ず子が授かる」と言われて、界隈の信仰を集めてきたが明治五年、大政官令によって取り片付けられた。

### (3) 機且池 (はたごいけ) の故事

大蚊里の部落に近く、機且池と称して底暗く淀んだ一つの古びた池があった。今は昔、大蚊里に機織の下手な若い嫁がいて、明け暮れ織方が悪いと言って口喧しく虐げられた。嫁は女心の悲しさに堪え兼ねて、ある夜遂に機且を背負ってこの池に入水して果てた。それから、この池を機且池と呼ぶようになったと言う。今も若い嫁の怨念が残ってか、雨の降る日や真夜中になると、池の底で機を織る音がすると言う。

## 8 手水鉢、道標

灯笼など石に刻まれた年号は、確かな歴史の証である。校区内に現存するものを年代別に紹介する。

手水鉢	正徳5年(1715)	八所神社
灯笼	享保4年(1719)	八所神社
秋葉山常夜燈	享和2年(1802)	珠光院
手水鉢	文政10年(1827)	林広寺
手水鉢	文政10年(1827)	柴屋神社
手水鉢	文政12年(1829)	金山神社
道標	天保11年(1840)	大村町桜島

道標 安政5年(1858) 大村町高之城  
道標 安政6年(1859) 大村町桜島  
その後発見されたもの  
手水鉢 文政12年(1829) 金山神社



金山神社の手水鉢

本年(2006)金山神社内で発見された。現存する手水鉢と同じ年号のため、もう一つあった神社(天王様)のものと推察される。もう一つ、大村小学校校門横にある道標は、天保年代のもので、正面に「左しんしろ道」と刻まれている。もと、ヌカデの堤防にあった。



大村小学校正門横の道標

明治22年(1889)第1回町会議員に当選、明治26年(1893)豊橋電燈株式会社を設立、明治34年第8代町長、明治39年~大正9年市議会議長、明治40年(1907)豊橋蚕糸株式会社設立、東三倉庫株式会社設立、明治43年(1910)豊橋瓦斯株式会社設立。政治家ならびに実業家として活躍した。

## (2) 武雄山喬義(1974~)

豊橋市初の関取。豊橋市長瀬町出身。大村小学校、北部中学校、愛工大名電高校、明治大学を卒業し、平成9年(1997)3月大阪場所角界入りした。新十両は、平成12年5月場所、新入幕は平成13年(2001)11月場所、最高位は前頭筆頭、十両優勝1回、敢闘賞2回受賞している。得意技は、突きと押し。武蔵川部屋に所属している。

## 9 大村の人

### (1) 福谷元次(1860~1943)

万延元年(1860)宝飯郡柴屋村(現大村町)林半次さんの弟として生まれる。沖木村(現大村町)珠光院の寺子屋に学び、明治15年(1882)豊橋札木福谷家の養嗣子となる。



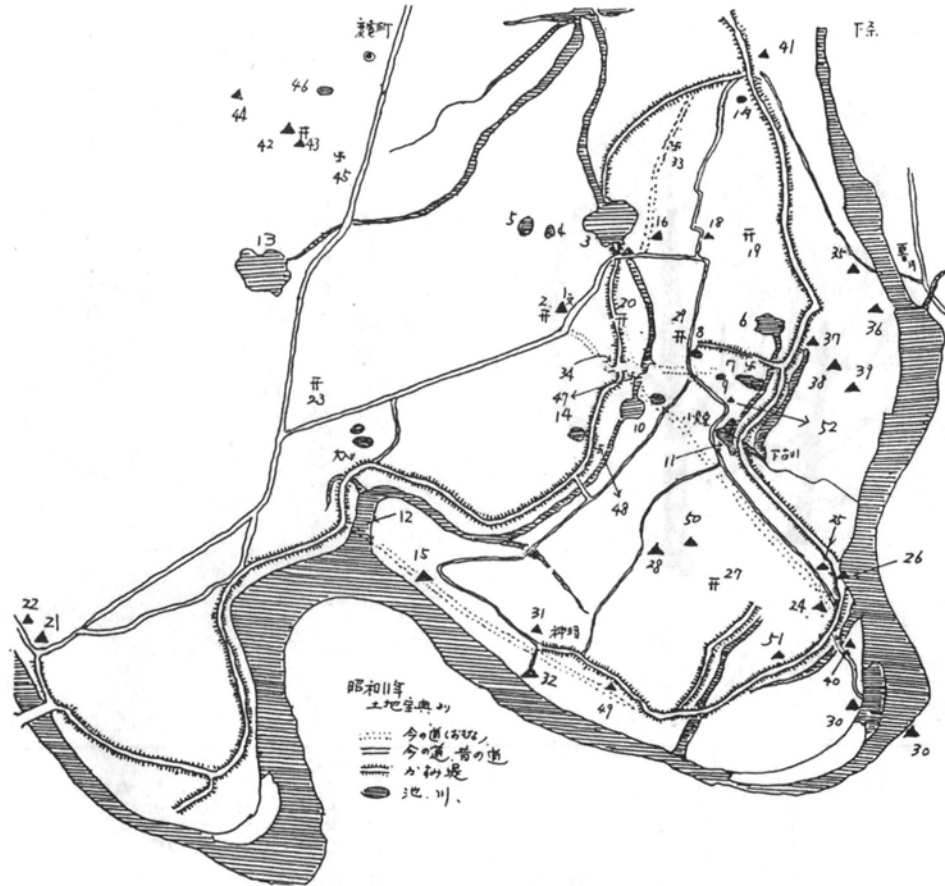
年 表

西 暦	年 号	校 区 関 連 事 項	参 考 事 項
1497	明応 6	8月地震のため豊川流路変わる	
1521	永正18/大永 1	近藤家(権左エ門藤原友和)大蚊里に入村	
1523	大永 3	白井家(四郎兵衛)入村、海蔵寺開基(長瀬)	
1531	享祿 4	大蚊里素盞鳴神社創建(牛頭天王)	
1539	天文 8	大津波発生	
1540	9	珠光院開基(沖木)	
1551	20	八王子創建(再興説有り)	
1552	21	長光寺開基(為金)	
1567	永祿 10	松原用水井堰を橋尾村(一宮町橋尾)に築く	
1571	元龜 2	武田信玄吉田城攻めの折、家臣山県昌景柴屋村に本陣を置く	
1577	天正 5	八王子修復	
1578	6	三河遠江に大積雪(四尺余)	
1585	13	大地震発生	
1590	18	池田照政吉田城主となる この頃豊川霞堤作られる	
1599	慶長 4	林広寺開基(柴屋)	
1600	5		関ヶ原の戦い
1609	14	長瀬素盞鳴神社創建(牛頭天王)	
1633	寛永 10	豊川大洪水	
1636	13	豊川大洪水	
1647	正保 4	今八所社創建(沖木)大日へ	
1650	慶安 3	柴屋素盞鳴神社創建(牛頭天王)	
1652	慶安 5/承応 1	光道神社創建	
1659	万治 2	珠光院改宗し曹洞宗となる	
1661	万治 4/寛文 1	長松院開基(住吉)	
1663	3		清須新田開発
1669	9	沖木阿弥陀堂創建	
1676	延宝 4	四ヶ村に分かれる(大磯村、沖木村、住吉村、柴屋村)	
1680	8	豊川大洪水	
1685	貞享 2	為金・金山神社創建 この年大地震・大洪水有り	
1688	貞享 5/元禄 1	豊川大洪水	
1691	元禄 4	橋尾井堰大破 柴屋村堤防切れる	
1708	宝永 5	豊川大洪水	
1711	宝永 8/正徳 1	大風雨	
1712	正徳 2	大風雨	
1714	4	大風雨、大洪水	
1724	享保 9	日照り続き飢きん発生	
1732	17	飢きん発生	
1750	寛延 3	沖木村差出帳(庄屋内藤六郎兵衛が吉田城主に差し出す)	
1755~57	宝暦 5~7	日照り続き飢きん毎年発生	
1770	明和 7	飢きん発生	
1781	安永10/天明 1	白山神社(沖木)、塩田25番地へ創建	
1783~84	天明 3~4	飢きん発生	
1789	天明 9/寛政 1	豊川大洪水	
1792	寛政 4	豊川大洪水	
1809	文化 6	八王子本殿造営(昭和37年沖木へ移築)	
1850	嘉永 3	大風雨発生、柴屋村袋屋敷堤防切れる	
1860	安政 7/万延 1	珠光院前堤防切れる	
1868	慶応 4/明治 1	八所神社と改名	
1872	明治 5	八所社と改名	学制公布、一村一神社仏分離令
1876	9	8月下河原珠光院内に豊田学校創立	
1877	10	豊田学校を大村尋常小学校と改称	
1878	11	沖木村、柴屋村、住吉村、大磯村、合併し大村となる	
1883	16	大蚊里村を合併	
1888	21		牟呂用水全通
1889	22	長瀬村を合併	

西 暦	年 号	校 区 関 連 事 項	参 考 事 項
1892	明治 25	6月、9月大洪水	
1893	26	ヌカデの堤防切れる 大村小学校を横走りに新築移転	
1894	27	八所神社と改名	
1896	29	豊川大洪水、数日間水引かず	
1898	31	豊川大洪水	
1900	33	八所神社祭礼に獅子舞始まる	
1903	36	ヌカデの堤防切れる	
1906	39	下地、鹿菅と合併、町制施行（宝飯郡下地町大字大）	8月豊橋市制施行
1908	41	産業組合設立（柴屋公民館西隣）	
1910	43	大洪水 為金にて22尺5寸	
1911	44	大洪水 為金にて23尺5寸、ヌカデの堤防切れる	
1912	明45/大1	下地・大蚊里郡街道開通 大洪水	
1914	大正 3	豊川改修運動始まる	
1916	5	7月とよばし開通	
1918	7	8月、9月大洪水	
1919	8	10月大風雨	
1921	10	大村小学校地之神（現在地）へ新築移転	
1923	12	大風雨、当古橋にて23尺5寸 大村小作人組合設立	
1925	14		豊橋市内電車開通
1927	昭和 2	8月、9月洪水	
1930	5	八所神社改築（拝殿、水屋、燈籠）	
1931	6	大長信用購買販売組合創立	
1932	7	大村小講堂新築 豊橋市に編入（大村町）	
1935	10	8月大洪水、為金にて23尺、9月も洪水あり	
1936	11		1月大寒波、氷点下6度豊川氷結する
1937	12	大洪水	
1939	14	大村耕地整理組合設立	
1943	18	豊橋市農業会大村支所となる	
1945	20		1月三河地震発生、6月豊橋大空襲
1947	22	大村農業組合発足	新制中学（北部中）開校
1949	24	耕地整理完工	
1950	25	御霊神社鳥居建立（定方神社より）	3月民衆駅豊橋駅完成
1953	28	9月台風13号襲来 大村保育園開園	豊橋市総代会発足
1954	29		豊橋産業文化大博覧会開催
1957	32	5月大村簡易水道通水	
1958	33		豊川用水宇連ダム完成
1959	34	9月伊勢湾台風襲来	10月吉田大橋開通
1962	37	八所神社大鳥居建立	
1964	39		東海道新幹線開通、東京オリンピック開催
1965	40	大村霞堤縮切完成	7月豊川放水路完成
1966	41	農協本館（鉄筋コンクリート造2階建）建設	
1968	43		3月牟呂松原頭首工完成
1969	44	竜巻大蚊里に襲来	東名高速道路全線開通
1972	47	3月西部農業協同組合大村支所となる	札幌冬季オリンピック開催
1974	49	七夕豪雨	
1975	50	大村保育園宮井戸へ新築移転	豊橋で530運動スタート
1976	51	大村小百年祭を開催	
1978	53		下条橋開通、行明・暮川・天王の渡船廃止
1979	54	北部地区市民館開館	30万都市豊橋誕生
1980	55		豊川流域下水道通水
1981	56	八所神社社務所造営	
1982	57	大村校区市民館開館 7月上下水道大村給水所を廃止、下地給水所に統合 8月洪水により下河原豊川堤防表法面崩落発生	
1985	60		1月異湯水で宇連ダム貯水率ゼロ

西暦	年号	校区関連事項	参考事項
1986	昭和 61		4月とよばし架け替え完成
1987	62		下地町豊川狭さく部対策工事完成
1993	平成 5		豊橋市の人口35万人を突破
1996	8	下水道組合設立、下水道一部供用開始	6月豊橋市新庁舎、9月豊橋駅橋上駅舎完成
1997	9	4月豊橋市内の5農協が合併し豊橋農業協同組合発足	
1999	11	9月竜巻襲来、住宅・農業施設被害を受ける	
2005	17	松原用水パイプライン完成	
		豊川大村堤防補強の用地買収始まる	

大村の昔ばなしの地図 (大村の昔ばなしこぼれ話より)



- |      |       |         |          |       |         |      |      |           |       |           |        |         |      |       |    |       |           |        |         |          |      |          |     |       |      |           |
|------|-------|---------|----------|-------|---------|------|------|-----------|-------|-----------|--------|---------|------|-------|----|-------|-----------|--------|---------|----------|------|----------|-----|-------|------|-----------|
| 27   | 26    | 25      | 24       | 23    | 22      | 21   | 20   | 19        | 18    | 17        | 16     | 15      | 14   | 13    | 12 | 11    | 10        | 9      | 8       | 7        | 6    | 5        | 4   | 3     | 2    | 1         |
| 金山神社 | ごへいせど | 長光寺と銀杏  | 血吹き大松跡   | 若宮八幡宮 | 旧東海道    | 稲荷せこ | 光道神社 | 長瀬のお宮     | 矢落ちの松 | 長瀬のさんまいしよ | 長瀬の藪   | 今の地区市民間 | 西浦の池 | はた織り池 | 赤池 | キレット池 | 勘太池       | 片葉の葦の池 | 首洗池と酒井堤 | 珠光院と珠光院池 | 下河原池 | 見田池      | 櫻池  | 宮井戸池  | 柴屋神社 | 大村小学校、定方様 |
|      |       |         |          |       |         |      |      |           |       |           |        |         |      |       |    |       |           |        |         |          |      |          |     |       |      |           |
|      |       | 52      | 51       | 50    | 49      | 48   | 47   | 46        | 45    | 44        | 43     | 42      | 41   | 40    | 39 | 38    | 37        | 36     | 35      | 34       | 33   | 32       | 31  | 30    | 29   | 28        |
|      |       | こんぞう坊遺跡 | 大昔の住吉神社跡 | しゃぐう神 | 大昔の柴屋神社 | 林広寺  | 長松院  | 教会の所にあつた池 | 東昌寺   | 五貫森貝塚     | すさのお神社 | 大蚊里貝塚   | 羽衣の松 | お杉橋   | 大藪 | 馬捨て場  | 白井四郎べえ屋敷跡 | 大村天神跡  | 古い街道    | 霞堤の切れ目   | 海蔵寺  | いも川岸(がし) | 一本杉 | 牛川の渡し | 八所神社 | 大村さんまいしよ  |



## 編 集 後 記

校区史は、豊橋市制100周年記念事業の一環として、各校区が一斉に編纂することとなり、大村校区史の編纂にあたり平成17年2月、校区総代会より編集委員12名が委嘱されました。

私どもは、編集委員といっても素人ばかりですが、市総代会より示された編集要領、プロット立て、仕様に沿い執筆分野を定め、校区総代会長の内藤克弘氏を中心として、月1回のペースで各委員が担当している分野の原稿・参考資料等を持ち寄り、委員全員で検討を重ねながら編集委員会を進めてまいりました。

大村校区の歴史について過去に編纂された「大村史」、「大村小学校百年誌」、「大村八所神社と松原用水」などに記されている事項を再確認し、委員一同が共通認識を持ちながら、古から現代までの大村の歴史を振り返り、「校区のあゆみ」として完成の運びとなりました。

最後に、写真・資料の提供などご指導、ご協力を賜った校区の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成18年8月

大村校区史編集委員一同

### 大村校区史編集実行委員

#### 大村校区史編集委員

田中 徳美	内藤 克弘	尾崎 安貞	富永 智	富永 隼司	近藤 三吉
鈴木 秀明	白井 宏忠	伊藤裕一郎	林 俊憲	小林悠紀彦	林 照男

#### サポーター 協力者

平松 悠介	石黒 巖
-------	------

### 校区のあゆみ 大村

平成18年12月25日発行

編 集 大村校区総代会  
大村校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会  
印 刷 株式会社 きょうせい

R2100

当紙配合率100%再生紙を使用しています







2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋